

わたしの

人権の森

目次

活動の記録 ― 004

〔座談〕 活動を振り返って―有蘭真代さんをむかえて ― 026

有蘭真代（社会学者、京都大学大学院文学研究科非常勤講師）
 十 授業参加者

〔座談〕 切実さをもって切実さとの出会い ― 040

宮地尚子（一橋大学大学院社会学研究科教授）
 佐藤李青（アーツカウンシル東京プログラムオフィサー）
 宮下美穂（特定非営利活動法人アートフル・アクション事務局長）

はじめに

この冊子は二〇一八年春に、東京都東村山市南台小学校（以下、南台小学校）の六年生と行った図工の授業に触発されて湧き上がったいくつかの論点を取りまとめたものです。

南台小学校での取り組みは、図書の授業や市内にある多磨全生園（以下、全生園）見学との連携や、造形せずにグループで経験を分かち合う振り返りの時間をもつなど、日頃の図工の時間とは少し異なるものとなりました。「図工の時間なのに」と最初は戸惑う子供達も徐々に思索や造形を通じて模索する過程を繰り返し、自分や全生園見学の体験と向き合っていくようになりました。

東村山市の小学校では、学校の授業の一環として毎年、全生園の資料館の見学に出かけます。全生園は、一九〇七（明治四〇）年、国がハンセン病予防対策として定めた法律「明治四十年法律第十一号」（通称「癩予防法ニ関スル件」）にもとづき、一九〇九（明治四二）年、「公立療養所全生病院^{ぜんせい}」として設立された施設です。図工専科の教諭とNPOのスタッフ、子供達は全生園訪問の時間をどのようなものとしてとらえるのか、あるいはどのようにそのときの経験を思い出すのか、そして、どのように充実した体験に昇華させていくのか、何度も議論を重ね、図工の授業内で表現を通して経験を深めていくことを試みました。

結果として、授業は用意された図工素材に向き合うものではなく、前例のない課題にそれぞれの子供が持てる知識や経験をもって全身で向き合いながら、時に立ち止まって考える複雑で豊かな時間になりました。ここで見られたことは、能動的なものごとを見よう、考えようとすると、ものごとの見え方は変わるのではないか、ということでした。一人一人の経験の質は異なるもので正解もありません。結論を急かし、後ろから背中を押すようなものではなく、それぞれのものごとの感受の仕方や感知の速度、方法を尊重することや、手を動かしながら思考し、内的な対話を生む過程を大切にすることが必要となりました。

一方で、授業はグループ活動でもあり、グループ内の対話や発見の共有、触発し合い、力を合わせて大作に臨む姿も見られました。一人一人の内的な対話とグループでの活動が触発しあい、写真や詩を通して全生園に暮らした方々の困難や切実に生きることを求める様子に少しづつ触れることで、それぞれの子供達が街いのない切実さをもって向き合うことが、造形という行為を通して得られたのではないかと思います。それぞれの個性に応じた問う時間、多様な能動性を導ぶ授業となりました。

授業にスタッフとして参加した地域の大人たちにも、ハンセン病の歴史を学び、差別―被差別の問題に潜むさまざまな矛盾や照り返される自分自身の差別感を問い直すことで、大きな戸惑いが生まれました。他者を憐れむということに潜む力学、差別する人、される人という構図の中に改めて自分の身を置いてみることで、大人たちは逡巡し、子供達にできごとを語ることを足踏みすることになりました。建前や言い逃れなく、一人の「人」としてできごとに向き合うことを常に確認することは困難を生み出しました。結果として、自分自身の弱さも曖昧さも隠すことなく子供達と向き合う以外にないかもしれない、といった意見も聞かれました。

今回の取り組みでは、子供も大人も揺れ動きながら交感しあい、揺れ動くことを容認しない、いわば不寛容な社会の中で大変実り多い時間が生まれました。子供達と学校の関係のみならず、特に図工専科の河野路先生に心から感謝します。

わたしの人権の森

東村山市南台小学校図工科活動の記録
 二〇一九年三月

制作

特定非営利活動法人アートフル・アクション

発行

二〇一九年三月二三日

発行者

アーツカウンシル東京

（公益財団法人東京都歴史文化財団）
 東京都千代田区九段北四丁目一二八

九段ファーストプレイス八階

電話：03-6256-8435 ― FAX：03-6256-8829

www.artscouncil-tokyo.jp

図書設計

松田洋一

本書は無断複写、複製、転載を禁じます。

©2019 npo artfull action

本書に関するお問い合わせ先

特定非営利活動法人アートフル・アクション

東京都小金井市本町六丁目五―三

シャトー小金井二階

電話：030-3627-9531

https://artfullaction.net/

mail@artfullaction.net

ISBN 978-4-909894-05-2 C0070

ARTS
COUNCIL
TOKYO



開催の記録

図書・ブックトーク	五月九日（水）
多磨全生園見学	五月二四日（木）
第一回交流授業	五月二五日（金）、
第二回交流授業	五月三一日（木） 振り返り
第三回交流授業	六月四日（月） 制作
第四回交流授業	六月一日（月） 制作
	六月一八日（土） 公開授業

活動場所…図工室

展示鑑賞場所…南台小学校三階

主催…東京都、小金井市、アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）、NPO 法人アートフル・アクション

＊小金井アートフル・アクション！（小金井市芸術文化振興計画推進事業）は「誰もが芸術文化を楽しめるまち―芸術文化の振興で人とまちを豊かに」という理念の実現を目指し、二〇〇九年四月から市内各所で事業が進められています。二〇一一年度から、東京都、小金井市、アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）、NPO 法人アートフル・アクションの四者共催により「東京アートポイント計画」の一環として実施されています。

活動の記録

●図書・ブックトーク―五月九日（水）

図書の時間に司書の先生からハンセン病に関する図書の紹介と朗読をしていただきました。この時間の後はそれらの図書は「文庫」のように子供達の手近におかれました。

●多磨全生園見学―五月二四日（木）

二クラス合同でハンセン病資料館、全生園を見学し、ハンセン病回復者の佐川修さんのビデオ映像、学芸員の方からの歴史等に関する話を聞きました。その後、全生園内の山吹舎で昼食、ホールで平沢保治さんのお話をうかがいました。グループで園内の散策も実施しました。

●第一回交流授業―五月二五日（金）、三一日（木）
見学の振り返り

初回は振り返りに重きをおきました。図工室内に掲示された写真、三五〇分の一の立体地図を眺めながら、それぞれの思いや気づきについてグループで対話しました。大きな模造紙を使い、気づきやメモを記述していきました。視覚化された多様な気づきから新しい気づきが生まれる場面もたくさんありました。

●第二回交流授業―六月四日（月）制作

初回に対話しつつ描いた模造紙を元にグループとして何を伝えようとするのか、話し合いをしながら制作を始めました。入所者の方の詩の朗読や写

真集を眺めたり、見学の経験に立ち返る対話が制作の過程にも多くみられました。

●第三回交流授業―六月一日（月）制作

おおよそ伝えたいことの輪郭が現れてきて、内容に即して素材を選び加工方法を相談しあいながら具体的に細部まで考えた制作ができました。展示設営の場所を決めました。

●第四回交流授業―六月一八日（土）公開授業

公開授業にむけて校内への設営を行いました。校舎の中に二ヶ所、展示箇所を子供達が定め、場所と内容、メッセージを考えて制作、展示しました。公開授業では、制作の過程を保護者が見学したり、説明の時間を設けることを意図しましたが、制作は時間内に終わらない場面もみられました。展示は二週間行われました。

活動場所・図工室

展示鑑賞場所・南台小学校三階

授業のプログラムづくり、資材や材料の調達を図工専科の河野路先生とNPOとの協働で検討を重ねました。

主な材料はベニヤ板や段ボール、木々の枝、竹、木材、布類、土や紐類、毛糸、粘土など。主な道具は、鋸や金槌、電動鋸、錐、カッター、木工用ボンド、絵の具、クレヨン、色鉛筆、ラッカーな

- 一部屋にギュウギュウなところをうまく表現できた。
- 地味につくりこまれていた。
- 地面に見えるよう土粘土をつけたら土のように見え、畳のようなものを使ったら畳に見えて良かった。
- 人がきゆうきゆうになるように
- ちようどよい人の大きさにできて良かった。
- みんなで協力していろんな家具をつくれた。
- ミニチュアだったけれど上手にできた。
- 人の首も上げているところがあり
- 修復した跡が残ってしまった。



約二畳の中で八人が寝ている

六年一組一班

喜怒哀楽の山吹舎



どです。特に今回の授業では、ハンセン病の患者さんの詩や物語、全生園の写真集、中でも趙根在さんの写真集『趙根在写真集――ハンセン病を撮り続けて』は一班に一冊を用意し参照しました。

クラスと班、タイトル制作の風景は以下の通りです。

●印は、実際に制作をした六年生の感想です。

○印は、他学年、他クラスの生徒の感想です。

- 六年一組一班 喜怒哀楽の山吹舎
- 六年一組二班 言葉の畑
- 六年一組三班 一〇mのハンゴ
- 六年一組四班 無題
- 六年一組五班 四季
- 六年一組六班 ハンセン病ミニ資料館
- 六年二組一班 忘れない写真館
- 六年二組二班 出られるけど出て何もない壁
- 六年二組三班 うれしさとかなしさと
- 六年二組四班 心の光の部屋
- 六年二組五班 お墓と墓
- 六年二組六班 山吹舎

- 狭い中で寝ている人が印象に残った。
- 山吹舎の狭さが表現されている。
- 一室約一二畳の中で八人が寝ているのできつそうだった。
- 山吹舎のミニ版だったけど池などがリアルで面白かった。
- 人間が可愛かった。
- 床の粘土がちょうどいい感じに割れていたのでもりリアルですごいなと思った。
- 天井の光があるのがすごいと思った。
- 井戸があるのもすごいし、木自体がいいと思った。
- 地面がすごく昔に似ている。
- 人がいて面白いし、手がないところも表されている。



言葉の畑

言葉の葉が芽吹き育った感じ



- 畑をうまく再現できたと思う。でも時間をあまりうまく使えなかった。それでもたくさん言葉の葉が芽吹き育った感じはとてうまくいった。
- 葉に書いてある言葉もみんなにわかってもらえるような感じにできて良かった。葉っぱの色が土とかぶってしまったから失敗したかと思った。
- ベニヤ板を全て隠れるようにしたい。
- 全生園の人たちが昔思ったことが畑の葉っぱに表されている。
- 言葉の畑をつくるときにうまくいった。

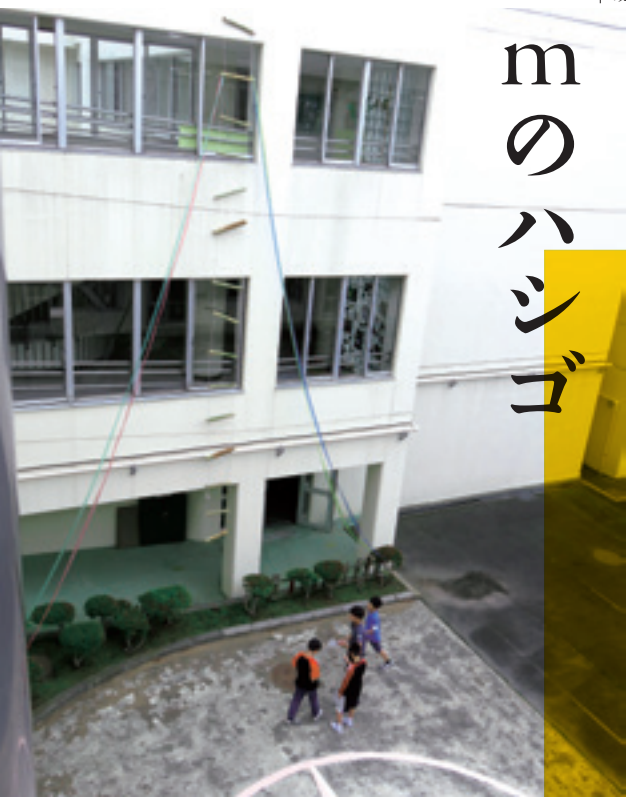
○ いろいろな言葉の畑があって良かった。地面をつくっていて良かった。



望郷の丘を再現している

- 竹をひもでつなぐのがむずかしかった。実際に登ろうとしたらひもが切れてしまった。次につくるときはしっかりとひもを固定して登れるようにしたい。
- ハシゴが目立つようにカラーテープを貼った。竹と竹の間を決まった長さでつくった。一五mくらいのハシゴをつくるために三〇本の竹を用意した。竹を（等間かくで）ひもでつなぐのがむずかしかった。

- 竹をひもでつなげて、スズランテープでにじのようなものをつくっていて、にじの橋のように感じた。
- 竹をひもでつなげて、一階から屋上につながっているスケールの大きさがいいと思った。
- 望郷の丘を再現している。



10mのハシゴ

六年一組三班



一つ一つ違う木をつくった

- 高い木、低い木があって良かった。
一人一人違う葉っぱでつくっていて良かった。
床に色があって良かった。
ハエが上に乗っていた。
- 一つ一つ違う木をつくったのが良かったと思った。
葉をつけるのが一番むずかしかった。
葉などをつけて木を再現するための工夫ができた。
光が差し込むところに置き、
光が差すように工夫できた。
ゆれる感じを再現できた。
- 木のつくりが
よくできていて良かった。

無題

六年一組四班



- 四季で全生園の人の暮らしや一生を表した。

木は粘土で、葉は綿や毛糸でつくった。

地面はその季節によって色を変えた。

茶畑や雪、季節に合った風景にした。

どの季節にも必ず人を入れるようにした。

- 一回目は模造紙に「全生園で感じたこと」を絵で描いた。

二回目は前半、模造紙に絵を描いていたら、

みんな「木」が心に残り、つくるものは、

四人だったから四季を表現するということで土で木をつくった。

三回目は木にいろんなものをつけたり、土台をつくった。

四回目は小物を取りつけて完成！

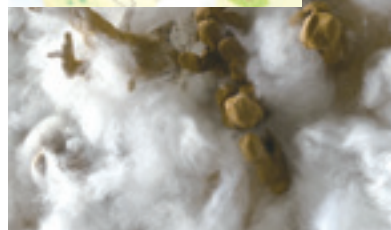
- 一番簡単な自分のやつ（季節）が一番派手になっていた。

また非常に雑になった。

六年一組五班

四季

- チョークの粉で季節の色を再現していてすごく良い。
綿や糸を使い、木などをつくっていて良かった。
- 冬木の個性が出ていて良かった。



チョークの粉をふりかけ、季節のイメージを再現できていた。

- 木の近くにいる人がその時の場面を想像させるようだった。

○ 各木の季節がわかりやすく出ていて、それに人を加えていて、
よりリアルに見えているところが良かった。

背景も季節感が出ていて良かった。

- 四季の変化が雪・さくら・紅葉・緑で表現していて
分かり易かったし、人や木の質感もリアルで、
全生園の四季がとてもよくわかった。

○ 全生園に住む人の営み、一生、四季の木、一生の木。

○ 全生園に住む人々の様子がよくわかります。
また全生園の四季折々の姿がよくわかります

- 春夏秋冬の風景がつけられていた。

○ 春夏秋冬のことがわかる。

人の営み、一生、四季の木、一生の木



● トンネルをつくるのがむずかしかったけど、ハンセン病の人々の辛さがよくわかった。詩に込められている思い、写真に込められている思いがわかってきた。

● 大変だったところは材料を切って運んでネジで留めたところだった。その後、自分たちで決めた写真・俳句を中に貼っているところは、光が入って見えやすいようにするところがむずかしかった。

● 組み立てが難しかった。
みんなの意見を主張しながらやるのがむずかしかった。
あまった時間で食事の作品をつくったら、男子が怒っていた。
ただどあまった時間に何かやってはダメと言われていないのでいいと思ってやっていた。けっこううまくできたと思う。
● むずかしかったところは材料を切って運ぶところとネジでとめ、その後自分たちが決めた写真と、自分たちで考えた詩を中に貼ったところ。穴を開けたところは音が大きかった。

○ 資料館にあった資料を書いたり、写真と説明があって良かった。
上から光を入れていたところも良かった。
○ 写真があって、その横にその人の様子や思っていることを書いていいと思った。
上に穴を開けて光が差し込むようにして写真や文字が見えるようにしていいと思った。
○ トンネルの中にいろんなものが書いてあった。
○ 大きくてももしっかりしていいと思った。
中にはたくさん資料があってすごいと思った。
上に穴を開ける工夫が良くて、光が入ってくるので資料も読めるしいいと思った。
○ 入れて全生園の人たちの気持ちなどを詳しく表しているところが良かった。
○ トンネルの中に資料がいっぱいあった。
○ しっかりと暗闇の中の光を再現してとても良かった。トンネルと同じように暗さを再現。
しかも人が四人ぐらい入れるスペースをつくっていたので良かった。

○ 一つ一つの写真に一つ一つ文を詳しく疑問形に説明していた。
光が差すために屋根に穴を開けている。そして、明るい。
○ しっかりと暗闇の中の光を再現してとても良かった。その中に写真もあって良かった。
○ 上から光が入ってきている雰囲気の中に書いてあるものと写真を見るのとよく合っていた。

図工なのに 道徳をやったかのような 気持ちになった



○ 穴があって光が差し込み、文字などが見えるようにしていたのでいいと思った。
写真のとなりにその人たちのできごとなどが書いてあったのでとてもわかりやすいなと思った。

○ 資料館を再現している。
光の当たり方や資料の配置がとてもよく似ていてすごいと思った。
写真も貼ってあって、たしかに資料館そのものだと思った。
初めて資料館に行ったときと同じ気持ちになった。
詩なども書いてあって、再現力が高いなと感じた。
○ トンネルになっていて体験できてとても良かった。
上からの光がいい感じに差し込んでいて良かった。
また写真がうす暗いのがまたいい。
写真の横にオリジナルの詩があって心にしみた。
人々の心の叫びが聞こえた。

○ いろいろなところに穴が開いていて、さらに写真や説明が貼ってあって、面白いと思いました。
暗いけれど光があって良かった。

○ 全生園の写真に説明が付いていて、とてもわかりやすく良かった。
説明では人々の気持ちや問いかけるような文で、それも良かった。
つくったものはただ部屋に展示するより、落ち着けて良かった。
○ これをつくった人の思いが伝わるミニ資料館になっていたと思う。
ハンセン病の人のふるさとへの思いが伝わった。
家に帰れない人がいるのはかわいそうだと思った。



ハンセン病 ミニ資料館

六年一組六班

「光の空へ羽ばたけ」という言葉がじーんとした。

○本物っぽかった。一つ一つ感想が書いてあっていいと思った。
明かりがいらないように、穴が開けてあってすごいと思った。

○ハンセン病の写真にそれぞれ思ったことを書いて添えていたところが、
自分たちの班とすごく似ていた。

いろいろな人が書いていたから自分の視点とは違う世界が見えた。

○木でトンネルをつくっていてとても大がかりだと思った。
中に写真を貼ってその隣に写真についての文字が書いてあって、
ハンセン病の人の苦しみや悲しみがわかった。

食べ物のサンプルみたいなものが置いてあって細かいところまでつくっていると感じた。

○トンネルみたいな形のものの中に資料館みたいな資料がたくさんあった。

○中にハンセン病患者の写真があったので、ハンセン病の人の生活がよくわかった。
写真に説明が書いてあったのですごいと思った。

天井に穴が空いているので薄暗い感じ。

○木箱の中にハンセン病の歴史があってすごかった。

天井に電気が無くて、○の穴で光を出していたのが工夫してるなと思った。

○ハンセン病ミニ資料館は木箱の中に写真と説明が書いてあり、

トンネルみたいな箱の上にお団子みたいなものが置いてあった。

箱の上にまるーく穴が開いていて、中が少し明るかった。

○中に穴を開け、光を通して、中にある写真で昔の人の暮らしを表している。

確かに資料館っぽいと感じて面白かった。

○トンネルの中に写真と写真と詩のようなものが貼られていて、
改めてハンセン病のことを考え直した。

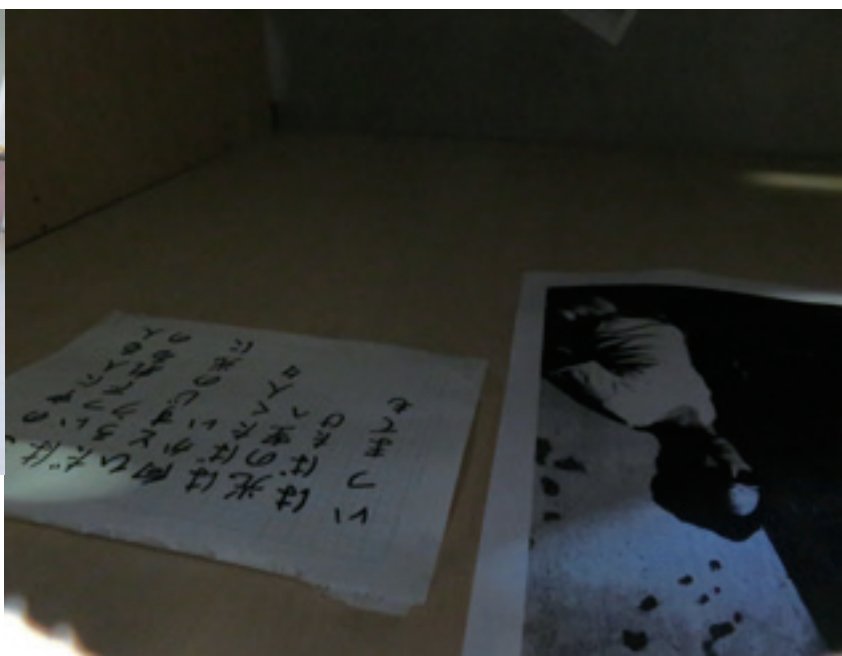
トンネルの上にあったお団子のようなものは何かを知りたい。

(トンネルの天井の穴は) 小さい方がいいと思った。

○中に入れて、穴があり電気みたいになっているのが良かった。

○ハンセン病ミニ資料館の中が、ハンセン病の様子の写真と説明文が書いてあったのがいいと思った。

○トンネルみたいな形でハンセン病についてのことを写真付きで書いていて、とてもわかりやすかった。
ハンセン病にかかった人がどんな思いをしていたのがよくわかった。



「光の空へ羽ばたけ」という言葉がじーんとした

忘れない写真館

●包帯をイメージしてつくったものがうまくできていた。
上を見ると竹を編んでつくったものもうまくできていた。

でも少し雑だったので次は早くしたい。

少し汚れていたものも感じが出ていいと思った。

写真も目立っていたので良かった。

●話し合いで長くなったけれど、ガーゼに写真を貼って、
悲しみやうれしさなどを表現できて良かった。

ハンセン病の方々の思い出を飾っている



○ハンセン病の人たちの気持ちがわかる。

○竹に白いテープがつるさされていて、
そのテープに写真がつけてあった。
いろいろな意見が紙に書いてあった。

○上から包帯をつり下げ、
ハンセン病の方々の思い出を飾っている。
竹で網をつくって、つり下げやすくしている。
なぜ包帯を下げているのか知りたい。

なぜ包帯を下げているのか知りたい

● 私たちは出られるけど出ても何もない壁をつくりました。
一番の特徴（工夫）は原寸大でつくったことです。
なぜつくったのかといえば、ひいらぎの垣根がなくなればそれが自由なのかな？
家族は待っていてくれるのかな？と疑問に思ったからです。
全生園のひいらぎの垣根。
実際に見たらどう感じるのかを知って欲しいと思い、つくりました。
● 最初はつくれるのかなと思っていました。
けれど、みんなと力を合わせてつくることができました。
● ぼくはひいらぎの垣根を緑に茂っているところを塗ったり、
ギザギザにして逃げ出せなかったというところをイメージしたりしてつくった。
また、逃げて何もないというところをイメージした。
● 柵の葉をギザギザして見えるようにトゲトゲ感を出した。
木の枝を絵の具で描き、紙粘土で実をつくった。
全生園の柵の垣根が実際にあったらどんな風に感じるのかを知って欲しくてつくった。
全生園の柵の壁というものをハンセン病の人たちの目線でつくれた。



家族は待っていてくれるのかな？

六年二組二班

出られるけど 出ても何もない壁

○ 立って見ると座って見るのでは全く違った。
ひいらぎの毒々しいトゲもいろいろな素材を使って再現されていた。
高さも立っていれば「あと少し！」と感じるが、
座ってみると「もう帰れない。」と感じた。
もし本当にこれがひいらぎの木だったら…
もうこの世の中から忘れ去られたら…
人々の悲しみがわかる。

○ けっこうな大きさを再現されていて良かった。
ひいらぎの実まで再現されていてすごいと思った。隣の木もちょっと強度があった。
○ 実際の高さを見て、その人たちの気持ちが少しわかった気がした。
思った以上に高く、抜け出せた人はすごいと思った。

○ 「出られるけど出ても何もないかべ」。
これは本物の高さと同じくらいで、当時ハンセン病療養所に入れられた人は
ここから出ようとしても出られないという悲しいことを思い浮かべてしまう。
葉っぱを紙粘土やダンボールで再現しており、「すごいな」と思った。
○ 全生園にいた人が逃げ出したくても逃げることでできなかった原因の一つ、
ひいらぎの高い垣根。
原寸大になったひいらぎの垣根はみんなの苦しみか、
悲しみか、何かが詰まっているようだった。
こんなに迫力があって心に残るような感じがするものは
そんなにないだろうと思った。

○ 「出られるけれど出ても何もないかべ」で
絶対に逃げ出すことができないくらいの高さなので
差別されていたことがよくわかる。
ひいらぎなので監視員たちの冷たさもよくわかる。



座ってみると
「もう帰れない。」と感じた





- たぶんハンセン病の人の気持ちを少し表せた。つくってみてハンセン病の人たちのたいへんさがわかって良かったと思った。
 - 人々の感情がみえる。上から吊るしているからよく見える。
 - つくるのより気持ちを表現するのに時間をかけた。ハンセン病患者の気持ちを体験コーナーをつくってわかるようにした。
 - たくさんさんの写真を吊るすまでは部屋の中が少し寂しかったけれど、上に写真を吊るしてからは部屋が寂しくなくなった。
- また、軍手をグルーガンで固定してハンセン病の人の気持ちをわかってもらい、ハンセン病に対する正しい知識につなげてもらおうというアイデアが良かった。

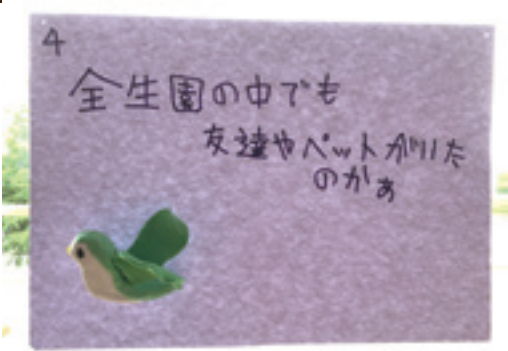
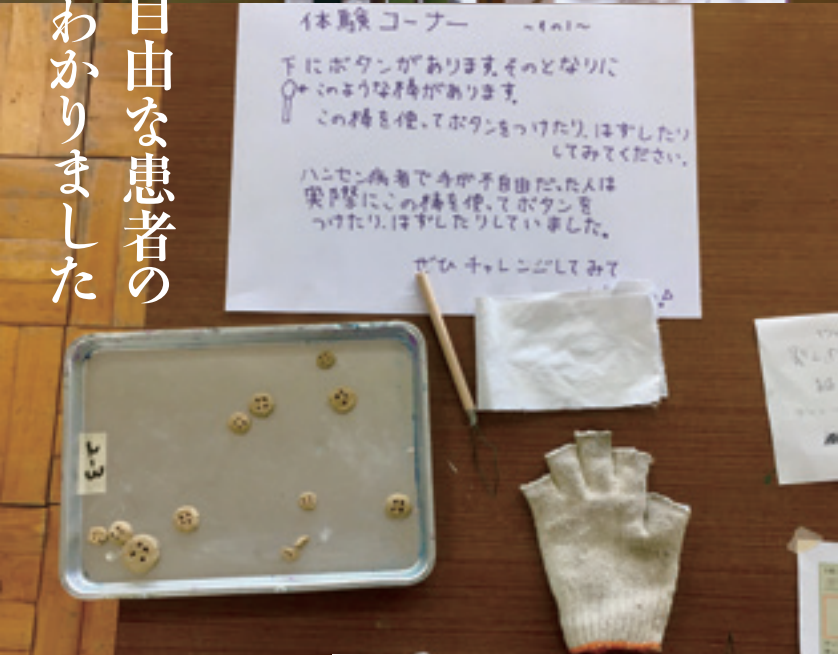


- いろんな体験ものがあっていいと思った。
- 体験ができて良かった。あまりにも書きづらくてビックリした。
- たくさんさんの写真と一緒にそのときの気持ちが書いてあって良かった。
- 「鳥」がイメージだったようなので、空中に飛んでいるような感じに工夫してあっていいと思った。
- 体験のコーナーもあって、当時の患者さんの気持ちがよくわかった。
- 自分たちで体験できるのがけっこうすごいと思った。
- 天井からぶら下げてるのも面白いこの展示の特徴だと思う。絵などもすごいと思った。
- 天井からぶら下げてるものが光に透けて、すごくきれいだった。
- 正しいこと、正しくないことは曖昧で、悲しみや辛いことは別れているものではなくいろいろな見方ができて面白いです。
- 手の不自由な患者の辛さがよくわかりました。
- 写真がぶら下がっていて体験するところがあって楽しかった。
- (指先が使えない) 軍手で書くとき書きにくいことがわかった。うれしさで悲しさのことを考えた。
- 悲しみと嬉しさははっきり別れていないことを表している。
- そして鳥は自由に外も中も行くことができる。だから鳥を置いたらいいと感じた。
- 軍手で不自由さを再現しているのがいいと思った。
- 教室全体を使って再現している。体験のコーナーまであるからわかりやすくなっている。

- ハンセン病の人たちの気持ちを写真と言葉で伝わるようになってすごいなと思った。
- ハンセン病の人たちの気持ちはこうなんだろうと改めて考えられて良かった。
- (展示を) つくった人たちのアイデアが素晴らしいと思った。
- いろいろなシーンの写真と、それに対する思い・エールが書いてあって、全生園での様子が少しわかった気がする。
- ハンセン病患者の手足の不自由さがわかった。部屋中にある写真についてのコメントが良かった。
- みんなの疑問やつぶやきが糸で吊ってあり、ハンセン病の人たちの辛さや努力がにじみ出てた写真がたくさんあった。
- どこかほっこりしているけれど、写真の中の人たちはたくさん苦労してきたように感じる。
- 軍手の体験はボタンをつけるのに一苦労した。
- いろいろな写真が吊ってあって、ハンセン病の人たちの苦しみがよくわかった。
- ハンセン病の人たちの気持ちを紙に書いて、患者の人たちの悲しみがよくわかった。
- 写真がいっぱい吊ってあってまるで美術館みたいだった。

うれしさとかなしさ

六年二組三班



手の不自由な患者の辛さがよくわかりました

●扉を切ったり、枠をつけたり、いろいろと大変だった。
けれど、がんばったかいがあって、完成したのはとても落ち着くスペースになった。
光で感情をしっかりと表すことができて良かった。

●ハンセン病の人たちの心の光を色で表した。暗くするために周りに布を張り、下には絨毯を敷いた。
（展示場所が）ドアの長さの板の大きさが合い、コンセントがあり、ピッタリな場所だった。
ドアはつくれたが奥行きがつかれなかったので、骨組みの上からカーテンで中を見せないようにした。
下をじゅうたんにした。コンセントで光をつけた。ドアが（開く向きが）うちと反対だった。

●全生園の人々の感情を表しました。人々の悲しみ、嬉しさ、悔しさなどを表した。
ドアをつくるのが難しかった。

ちょうどいいスペースでとても良かった。
ドアを虹色にしているんな感情を表した。

六年二組四班

心の光の部屋

○全生園にいた人たちの心の光が伝わってきた。

○光がきれいだった。あんなに大きな作品を
どうやってつくったのかが気になる。

がんばってつくったんだということがよく伝わった。

○光るのが良かった。しかし、密閉されていたわけではなかったので、
漏れる光があった。光を変える手間があった。

○自分で他の色の光も出せるというのが良かった。

○心の色というか、色がキレイで、表現の仕方が面白いと思った。
暗いから色がキレイで、私は全部の色がキレイだと思った。

○ドアの部分に色が塗ってあり、カラフルで良かった。あまり広くないというのも色が感じやすかった。
またふるさとに帰りたいという思いがドアにしっかりと表されていたので良かった。
中に入ってみると色の光によって心が落ち着いた。

○心の光の部屋 辛いことなどを乗り越えられる部屋が本当にきれいで、電気をつけたら、
緑が望郷の丘、青が悲しみ、赤が怒りで、そのカラーが全て部屋に入った瞬間に感じられた。
○光が三色あって面白かった。きれいだと思った。

ドアも虹色できれいだと思った。悲しみは光になるということがわかった。
中に入ったらどうなるか、扉を開けたらどうなるかがわかった。

○光が三色くらいあった。ハンセン病患者は孤独だったし、明るい未来が見えていなかった。
でも望郷の丘から故郷を眺めたりするときは明るい気持ちだったということがよくわかった。
○全生園から出て幸せに暮らしたいという思いが扉の外観に表れていて良かったと思う。

また中に入ってみると真っ暗の空間の中にある三色の光の色がとても落ち着くようだった。
ドアノブがあってドアとしてもリアルで良かったなと思う。

○青が悲しみ、緑が望郷の丘から見下ろした気持ち、赤が怒るときちゃんと表していてわかりやすかった。
ドアがにじいろでここでも感情が表していると思いました。

○コンセントを入れると部屋の中が光って、色で風景を表している。
中に入ったら、人それぞれ自分が行きたいところに心・頭で行ける世界。いい作品だと思った。

○ドアとドアノブがしっかり色がつけられているところがカラフルでステキ。
中の光の水色が悲しみで、緑色が望郷の丘から見た故郷への気持ちで、
赤色が少しの怒りという意味がちゃんとつけられていた。

○三色の光があった。

○心の光の部屋の中が赤・青・緑の三つの光がきれいに見えていたのがすごいと思った。
扉の左右のところを見てみると中が見えていた。

○ハンセン病の人が行きたいというところに行けないというのを変える

「扉」があったらというのがよくわかった。全生園の人が故郷に帰りたいと思っていた、
そして壁で囲まれて全生園から出られなかったので「扉」という考えはすごいと思った。



わたしの人權の森





六年二組五班

お墓と墓

- 納骨堂の中にある骨壺の形をがんばってきれいに整えた。猫の墓はきちんと名前と墓をわかるように立てた。
- 猫のために魚もつくり、花も本物にした。
- 納骨堂は三面つくり、似せて描き、同じ高さで吊るした。
- 本物の土と花を使っていた。
- 納骨堂と再現したもの（お骨を入れた骨壺）は中にライトを入れて、小さいおわんをお供えしていた。
- いかにも人間の墓と猫の墓が違うかわかる。
- 骨壺作りで形をきれいに整えるのも頑張った。
- 細かいところを友だちと一緒にやった。
- 土を持つてくるとき、スプーンで地道に掘って集めたけど足りなかった。
- 魚を厚紙でつくってお供えした。
- 猫の墓と人間の墓の差がすごいと思った。
- 愛猫の墓の完成度がすごい。
- 土や花などを作って写真の墓を再現した。納骨堂も工夫して表した。

人々のペットに対する気持ちがよくわかった



納骨堂を紙とライトで表現



○猫のお墓がリアルで良いと思った。本物の花があつてとても良いと思った。

○猫の墓が悲しみなどが伝わって良かった。だけど魚がリアルじゃなかった。

花がついていたのも良かったし、立てているふだみたいなものがリアリティーを出していた。

○愛猫熊之墓 お花が本物の花というのが、ぐっときれいに見えるし、

魚がとても細かく本物に見えるものが入っていて本格的だなと思った。

土は班の人に聞いたらていねいにスプーンでやったと言っていて、土が固まっていいていいなと思った。

○納骨堂を紙とライトで表現できていてすごかった。

○ペットの墓はしっかり再現されていてお供えの中に魚（作り物）が入っていたのが

リアルで良かったため、当時の人々のペットに対する気持ちがよくわかったと思う。

また花も供えられていたことから完全に再現しようとしているようで面白い。

○愛猫熊之墓がすごいと思った。理由は土を周りに敷いていて、丁寧に掘ってあるから。

しかも花やお供えの魚が置いてあってかわいいと思った。

納骨堂の中に骨（紙）が置いてあって、細かいところまで工夫していいなと思った。

○納骨堂は薄い紙に描いてあり、ライトでしっかりと見えていた。

（紙の）納骨堂の中には粘土で骨が入られているものがつくられていた。

隣に猫の墓があり、まわりはしっかりと土でおおわれている。

花も土に植えられていて、木の板の上にカップが置いてあり、魚があった。

○納骨堂の骨が細かすぎてすごかった。猫の墓がリアルで良かった。

土や花が周りにあって（墓の中の）猫も喜んでいと思う。エサの魚もかわかった。





- ネジを留めるのが大変だったけど、慣れると楽しかった。最後、満足できるものができたので良かった。
- 自分の班の「山吹舎」は全生園での生活を表している。
- 山吹舎の中で苦勞しながら、でも楽しく暮らしていたハンセン病の人たち。料理して、洗い物をして、井戸の水をくんで…。
- こんな日常生活を大人の男性約八人でこなさなければならなくなってしまった。でも前向きに明るく元気に住んでいる人たちを表そうと思った。
- 自分の班の山吹舎は人や囲碁など立体的にできて良かったと思う。
- 山吹舎の中の人の数をしっかり八人にした。
- 全生園の人が薪を隠していたという天井の穴もつくって、薪を入れたところを工夫した。
- 囲碁の碁石を入れる入れ物までかなり細かくつくった。
- 井戸で水を汲む人や習字をしている人などいろんな人をつくった。



でも楽しく暮らしていた
苦勞しながら

- よくつくりこまれていたので全生園をよく見ていたのを感じとれた。リアルにつくられていた。全生園の人々の感情がよく表れていた。
 - 屋根の上に屋根を直す大工さんがいていいと思った。井戸に水が入っているように再現していいいたり、屋根裏に木材が置かれていたりしていいと思った。
 - 囲碁をしているところが良かった。いろいろな山吹舎の風景が良かった。
 - よくつくられていた。全生園の人がうまっているのがわかる。
 - 立体感があって良かった。
 - 井戸で水が入っているような感じを出していいと思った。屋根の上で大工をしている表現がいいと思った。他にもいろいろな表現がたくさんされていてわかりやすいなと思った。
 - 山吹舎を木の板、紙粘土で表している。人は全員紙粘土でつくられていて、顔のつくりや表情がよくわかった。屋根裏の焚き木も細かく再現されていてとても良いと思った。囲碁をしている人もいたのが面白かった。
 - 山吹舎とそこに住む人の様子が工夫してあって見るだけでもよくわかってきます。食事のしたく、井戸から水を汲む人、建物を直す人、遊ぶ人など、様子がわかっていいと思います。
 - 山吹舎の中と外をわかりやすいようにつくっている。
 - 山吹舎の暮らしがとてもよくわかるように細かく再現されていた。屋根の上にもハンセン病の人の人形があった。
- (以下は作品全般に関する感想)
- 写真がたくさんあって良いと思う。建物が広いから良いと思う。
 - 全生園にいる人々の様子を描いている。
 - 全生園で考えていたことなのか、中に写真と一緒に飾られていてすごいと思った。
 - ハンセン病の人々の気持ちがわかるし、体験もできたから良かった。



山吹舎

六年二組六班



「座談」活動を振り返って 有蘭真代さんをむかえて



有蘭真代

（社会学者、京都大学大学院文学研究科非常勤講師）
十授業参加者

河野路（東村山市立南台小学校図工専科教諭）

宮下美穂（NPO 法人アートフル・アクション）

前田幸則（市民スタップ）

松村真文（〃）

瀧本広子（〃）

吉田典世（〃）

清水達生（〃）

石井万里（NPO 法人アートフル・アクション）

日下美和（小金井市立本町小学校図工専科教諭）

伊東操（小金井市立第四小学校図工専科教諭）

宮地尚子（一橋大学大学院社会学研究科教授）

宮下―東村山市には、一九〇九年にハンセン病患者の収容施設としてつくられた、国立療養所多磨全生園があります。市では、市内すべての小学校を対象に社会科見学を実施しています。NPO 法人アートフル・アクションでは、今年の五月から六月にかけて、東京都東村山市の南台小学校の図画工作の授業で多磨全生園をテーマにして活動しました。

私たちは一般市民によるボランティアスタッフの参加を得て、対象となる六年生二クラスを二チームに分け、多磨全生園の見学から、見学後の話し合い、作

品の制作、校内での展覧会までを児童たちと一緒にこの授業をつくってきました。

今日はゲストとして、今回の授業に大きな助言やヒントとなった『ハンセン病療養所を生きる 隔離壁を築に』（世界思想社、二〇一七年）の著者、社会学者の有蘭真代さんを迎えて、この振り返りの会をもちました。最初に有蘭さんに、ハンセン病療養所についての概略と、有蘭さんが直接触れあつてこられたその現在についてお話をいただき、その後授業に参加したみなさんとディスカッションを進めたいと思います。

●はじめに ――世界各地のハンセン病当事者を訪ねて

本日はお招きくださりありがとうございます。みなさまに拙著『ハンセン病療養所を生きる 隔離壁を築に』を読んでいただけたことを、とても嬉しく思っています。

ハンセン病者は日本でもそれ以外の国々でも、非常に苛酷な状況の中に置かれてきました。私は社会学の観点から、病者を抑圧し排除する社会構造を問題化し、それを批判的に分析してきました。そして同時に、病と社会的排除という二重の苦しみの中を、ハンセン病者がいかにして生き抜いてきたのか、さらには、たんなる生存維持という意味で生き抜くだけでなく、いかにしてそこで人間らしい暮らしを再構築してきたのか、生きることでも豊かなものへと変えてきたのか、こうしたところを丁寧に掘ってきたいと思ひながら、フィールドワークと記述を続けてきました。

はじめに自己紹介をかねて、私がどこどのような調査をしてきたのかについてお話しいたします。私は日本各地の国立ハンセン病療養所に通ひ、療養所内の

第一部―ハンセン病療養所を生きる―有蘭真代

面会入宿泊所に連泊しながら入所者の部屋を訪ね、フィールドワークと聴き取り調査を行ってきました。また、療養所退所者の自宅を定期的に訪ねて、彼らの生活史や、療養所で暮らしていたときのことなどについて、お話をうかがってきました。ハンセン病当事者の家族や、療養所職員に対する聴き取り調査も行っています。退所者の自宅を訪問すれば、同居しているご家族や遊びに来た親戚と会うことも多いですし、退所者と療養所職員という組み合わせのご夫婦もいらっしやいます。なので、療養所入所者から退所者へ、退所者から当事者家族や療養所職員へ、というかたちで聴き取り調査の対象範囲は自然と広がっていました。私は国内調査のみならず、海外のハンセン病多発地域でのフィールド調査も実施してきました。とくにインドネシアの関連施設や地域は何度も訪れていて、ハンセン病患者および回復者の生活実態を明らかにするための調査を行ってきました。

日本統治下で日本型の隔離施設が設置された東北アジアとは違い、東南アジアには、ハンセン病やHIVなどの患者および回復者や、身体障害を抱えた人々が集まって共同生活を営むコミュニティが数多く点在しています。こうしたコミュニティは「定着

村」と呼ばれていて、インドネシア国内だけでも六九個の村が確認されています。定着村で暮らす人々は、病が治癒しても故郷や自宅に帰ることができず、病院や療養所の周辺地域にそのまま定住したり、あるいは一般社会から離れた山奥や孤島などに村落を形成したりしながら、自らの労働と生活の場をつくる実践を脈々と続けています。物乞ひ、タクシーやベチャ（自転車タクシー）の運転手、養鶏、小規模農業など、村人の職種はさまざまです。日本のように強制的な断種や墮胎は行われていないので、定着村によっては子供もたくさんいて活気があり、独自の文化が育まれています。人里離れた定着村になると、医療や社会保障といった公的扶助が届いていないところや機能していないところがあります。こういう村では、人々は自前で治療体制や相互扶助システムをつくりあげていて、それが彼らの生存を支えています。たとえば、ハンセン病で脚を失った人のために、独学で義足のつくり方をおぼえて、廃材のブリキ缶など入手可能な材料だけで義足をつくってしまうようなすごい村人もいます。

私は、このような東南アジアでの現地調査に加えて、UCL Aに客員研究員として滞在していた時期に、米国の環太平洋規模の医療・衛生戦略についても



調査を行いました。今後は、日本と海外のハンセン病政策との違いも視野に入れて、国際的な観点からの考察も進めていきたいと考えています。

●日本のハンセン病政策と療養所

日本には現在、国立ハンセン病療養所が二三施設あり、約一七〇〇名、平均年齢約八四歳の入所者が生活しています。入所者のほぼ全員がハンセン病の治療をすでに終えた快復者ですが、病気への偏見や後遺症、老齢化のため社会復帰は難しい状況にあります。入所者のほかにも、療養所を退所して地域で暮らしているいわゆる「退所者」と、療養所に入所せずに治療を続けた「非入所者」がありますが、その正確な人数は明らかにされていません。

国立ハンセン病療養所は、名目上は「療養所」であっても、実情としては、患者を隔離収容することを目的として開園されました。一九〇七年に制定された癩予防法（一九五三年にらい予防法に改定）によって、ハンセン病は不治の病であるという誤った認識のもとで国家による終生隔離が基本政策とされたため、

原則的には、病者はいったん療養所に入所すると死ぬまでそこから出ることができませんでした。療養所内では一九六〇年代ぐらいいまで、施設運営のための「患者作業」が強要され、不自由者介護、重症者看護、火葬、糞尿汲取り、残飯回収、製炭、開墾、土木、給食など、重労働を含めたあらゆる職種で入所者は働かされ続けました。らい予防法は一九九六年に廃止になりました。

また、日本の国立ハンセン病療養所では、原則として、子供を持つことが許されていませんでした。結婚を希望する男性患者は断種手術を受けさせられ、妊娠した女性も強制的に堕胎させられました。公表されているだけでも約三五〇〇人（うち男性約二三〇〇人、女性約一二〇〇人）が、強制断種の犠牲となっています。

●ハンセン病問題との出会い

私自身がどのような経緯でハンセン病問題に関わるようになったのか、そのいきさつについてお話しします。これは、ハンセン病に関する歴史のどの部分をどのような視点から記述するのか、ということと関係してくるからです。

私は、最初は友人に誘われて、ボランティアとしてハンセン病問題に関わっていました。当時はハンセン病についてあまり詳しく知らなかったので、「誰かに喜んでもらえたら嬉しい」という軽い気持ちで参加しました。活動内容も、日常生活の延長にあるようなやさやかなものでした。たとえば、療養所退所者の自宅を定期的に訪問して家事のお手伝いをしたり、入所者の一時帰省をサポートしたりしていました。

入所者がほんの数日だけ故郷に帰省するにも多くのハードルがあります。ほとんどの入所者が、家族や親族を差別から守るために、実家とは絶縁して偽名を使っているからです。だから故郷に帰るときも、実家や親族の家には泊まることができない。かといってホテルや旅館だと、宿泊拒否をされてしまうことがある。顔にハンセン病特有の後遺症が残っていると、飲食店にも入店拒否されてしまうことがあります。後遺症が重い入所者だと、公共交通機関に乗って故郷まで

行くのもたいへんです。だから私たちのボランティアでは、療養所まで車で迎えに行ったり、泊まれる場所を提供したり、食事を用意して一緒に食べたりしていました。入所者の故郷に対する思いには、とても切実なものがあります。そのことは、多摩全生園に「望郷の丘」がつけられた経緯からもご理解いただけると思います。

このようなかたちでハンセン病当事者と関わっているうちに、ハンセン病者に対する世間の眼差しの冷たさや差別を、身をもって知ることになりました。また、強制収容された日のことや、かつての療養所の実態について、当事者が自らの経験を折りにふれて話してくださいました。強制隔離政策のあまりの酷さと惨さに、私は深い悲しみと怒りを何度も感じました。

でも、ハンセン病当事者と長い時間をともに過ごすうちに、隔離政策の「被害者」や「犠牲者」にとどまらない、彼らの多様な顔も見えてきたのです。たとえば、恋に落ちた入所者と看護師が、駆け落ちのようにして療養所を飛び出して一緒に暮らしていたり。あるいは別の入所者は、療養所外の一般社会の中に人脈をつくって、仕事を一緒に始めたりしていました。彼は幼いころからの夢を諦めきれなかったので、療養所で暮らしつつ一般社会で働くというかたちで、これを実現したのだと言います。ハンセン病者はたんなる悲劇のヒーロー、ヒロインではなく、叶えたい夢は自分で叶えるし、恋もするのです。この人間としてごく当たり前の側面が、ハンセン病者の歴史を理解しようとするときに、なぜか抜け落ちてしまいがちです。私自身もそうでした。強制隔離政策のあまりの酷さ惨さゆえに、その陰に隠れてしまうのかもしれない。しかし、ハンセン病者は隔離政策の客体であったと同時に、自らの生を能動的に切り拓いてゆく主体でもあります。彼らは並々ならぬ主体性をもって、艱難辛苦を生き抜いている。

私がとくに感銘を受けたのは、彼らが患者運動や創作活動などさまざまな集団的活動をつうじて、苛酷な生活環境を変えていったり、希望の持てる状況を自らつくっていった、その協働の方法とプロセスでした。どんなに厳しい状況の中にあっても、希望を失わず、他者と手を取り合い、知恵と工夫をこらして現実を変えていく。その方法とプロセスは、つねに生真面目で堅実なものだったわけではなく、ときにはエキセントリックだったり、とびきりユーモアが効いてたりする。彼らの協働の方法とプロセス、そのひとつひとつを社会的に分析することや、彼らが語るできごとを資料などの裏づけをとって歴史的にあとづけていくことは、必要で価値のあることだと思いました。それぞれの協働のエピソードの中に、病者をめぐる社会状況や時代背景が刻み込まれていたからです。こうして私は、研究者としてこの問題に着手することになりました。

私が論文や本にまとめたのは、彼らの経験のほんの一部にすぎません。私は、彼らが語ってくれたできごとのうち、新聞や機関紙などの文字資料や写真などで裏づけがとれたものだけを、記述し公開しています。ハンセン病療養所の暮らしについては、まだ知られていないことがたくさんあります。今後、市民や学芸員や多領域の研究者が協力し、さまざまな角度からの理解を深めていくことが望ましいと思っています。そこに私の研究がささやかでも寄与できたなら嬉しいです。

●地続きのできごととして受け止める

―― 封じ込められた過去を、現在の文脈のなかに解き放つこと

現代社会を生きる私たちや子供達が、ハンセン病療養所の歴史と向き合うことにどのような意味があるのでしょうか。この問いに対する正解はなく、そのつど問い続けていくことにこそ意味があると思います。この問いについて、現時点での私の考えを最後にお話しします。

「同じ過ちや悲劇を繰り返さないために、歴史と向き合う」、これはもう当然のこととして、話の前提とさせてください。そのうえで、もう少し積極的な意味を考えてみたいのです。「〇〇しないため」という抑制的で消極的な要素だけではなく、解放的で積極的な要素がないと、たとえば「善か悪か」といった二者択一的な判断にでき、ことを押し込めて思考停止してしまったり、あるいは多様性を認めないかたちで考えが

硬直化してしまいがちです。風通しをよくするための窓、あるいは袋小路から抜ける回路を用意しておきたい。それはシンプルなものでも良いと思います。たとえば、ハンセン病療養所の歴史と向き合う作業は、たんに過去のできごとを記憶し継承する意義をもつだけでなく、それぞれが自分の人生を捉え直すきっかけにもなると思います。日々の暮らしの中で痛みや苦しみを抱えつつも、とりあえず生きていかねばならず、状況を少しでもましにするためのさまざまな方法を模索したり、行動したり諦めたり、他者との敵対と和解を繰り返したりする点において、彼らと私たちは地続きの場所に立っているからです。彼らと自分の人生をこのようなかたちで交差させることは、過去の中に封じ込められたできごとを、現在の文脈に解き放つことへとつながるかもしれません。

社会学においては、地縁や血縁による共同性の崩壊が進んできたことが、すでに繰り返し指摘されてきました。また近年では雇用形態の流動化にともなって、労働現場における共同性も機能不全に陥りがちです。福祉や社会保障に関わる財政削減や市場化の荒波の中で、孤独や不安あるいは困窮に苛まれている人々も少なくありません。さらに個人間の競争や自己責任が過度に強調される近年の風潮の中で、人々は分断されればしばし深刻な意味喪失や相互不信に陥ることが、現代社会論の中でも指摘されています。何ことも評価や批判、否定や非難にさらされやすい、閉塞的で息苦しい雰囲気や社会全体を覆っています。

私は、こうした不寛容な時代の混沌とした社会状況の中で、今こそ、他者とともに在ることの新たな意味と可能性を描きたいと思ったのです。『ハンセン病療養所を生きる 隔離壁を翳に』は、読んでいるとエネルギーが湧いてくるような、もう一度生きてみようと思えるような、そんな本になるようお願いを込めて書き綴ってきました。どんなに厳しい状況の中にあっても、希望を失わず、他者と手を取り合い工夫をこらして、地味だけど着実に状況を変えてきた人たちがいたこと。その営みは、しかも面でもいつも生真面目になされていたわけではなく、とんちが効いていて痛快で、やんちゃで荒っぽくて少々お行儀が悪かったりもしたけど、それによって閉塞的な療養所暮らしの中に独特



第二部 一学校がミュージアムだったら、学びはどう変わるか

宮下「私は、「学校がミュージアムだったら、学びはどう変わるか」という問題意識をもって活動を進めています。南台小学校でも多磨全生園をテーマにした授業をこの観点から考えるところのような可能性があり得るのか、先生方や参加してくださったスタッフとも話し合いを重ねました。その中で全生園への見学を図画工作の時間で展開させることで、表現を通して体験を深める授業のあり方を考えていきました。

従来は見学して感想文を書くという授業だったそうです。けれども人間がものごとを感じたり考えたりするときに、実際に自分で何かをつくってみる、表現してみようという行為を介在させることで、全生園での体験がより深まるのではないかと考えたのです。

見学に先立って司書の先生から、全生園の自治会長であり「語り部活動」を長年行ってきた平沢保治さんの著書を紹介していただき、また、全生園見学にはNPOのスタッフ、市民のボランティアスタッフも参加しました。授業は四五分授業二コマ九〇分を一回として、合計四回の授業に参加しました。見学の後の最初の授業では話し合いに九〇分を、その後制作に二回、校内での展覧会は学校公開の日に合わせて行いました。

初回の授業ではすぐに何かをつくりたがる子、衝撃を受けて考え込む子などさまざまな反応が見られましたが、私自身は、見てきたものごとの「再現」で済ませてほしくないと考えていました。再現は、あまり考えなくてもできてしまうことがあります。ですから図工の時間ではありますが、今回はまずは考えたり話し合う「振り返りの時間」を十分とりました。ご担当の河野先生にも、つくる、造形するという言葉ではなく、表現する、伝えるという言葉を使っていたくようにお願いし、つくる、とい

うことに邁進しないように、参加した大人も心がけるようにしました。

河野「見学のすぐ後の「振り返りの時間」では、隔離政策が行われていたころの全生園の三五〇分の一の立体地図をスタッフが制作し、それを図工室の中心に置き、壁には当時の全生園の日常の風景が見えるような写真を掲示しました。子供達は自分たちが見てきたものごとを地図と写真で追体験しながら、振り返りをしました。そのときの地図や写真はたんなる資料ではなく、実感を沸き起こしてくれるような媒体（メディア）だったと思います。そういう実感を持ちながら、みんなで話し合えたことはとても良かったと思います。

宮下「はい、この立体地図は、どういうツールがあれば子供達が感じたり考えるきっかけになるのかと試行錯誤して用意したものでした。そして、これをつくることは、期せずして、大人も、写真では通り過ぎてしまうことも丁寧に見つめ、細かい読み込みを可能にすることにつながったと思っています。かつては所内で牛や豚を飼っていたというような歴史的事実に関する、さまざまな気づきがありました。そればかりではなく、入所者に対して「ひどい扱いを受けてかわいそう」というような、それまで私たちが感じていた目線ではなく、「ここには私たちが失った自治がある」というスタッフの言葉に象徴されるような、療養所に対する見方の変化も起こってきました。

療養所の方たちが、限られた環境の中でいかに自分の暮らしを楽しく豊かにし、自分の持つ技術で人を楽しませようとしてきたのか、といった工夫や努力への私たちスタッフの気づきを、どんなふうに子供達と話し合ったらいいのだろうと考えたときに、たとえば趙さんの写真集（『趙根在写真集——ハンセン病を撮り続けて』草風館、二〇〇二）も、とても良いメディアとなってくれました。さらにそれは、療養所の労働者としてもっと過酷な境遇と労働に直面していた在日朝鮮人の存在——もう一つの差別を教えてくれることで、一つの方向からだけではものごとは見られないという意味で、私たちの視野をさらに開くメディアでもありました。





◎考えてつくる、つくることで考える

村松「僕が最初に参加したのは、今日ここに持ってきていただいた、入所者の共同作業で建てられた屋舎を再現した「山吹舎」の作品を制作したグループの話し合いの時間でした。僕の力不足もあって、話し合いもそこそこに走り出しちゃったグループでした。その話し合いでは、見学のとき、そこでお昼ご飯を食べたから……というようなキヤッチーな理由で「山吹舎」をテーマに選んだところを、どうして「山吹舎」なのか、そのどこを説明したいのか、何とか掘り下げていって、たとえば「屋根に穴がある」というようなキーワードが出てきました。僕から見ると、それもまだキヤッチーな言葉なんです……。



河野「「振り返りの時間」は、机の真ん中に大きな模造紙を置いて、つぶやきながら、書きながら考える時間でした。考えるのがつらいという子もいましたが、不思議に「かわいそう」という言葉はあまり出ないんですね。「かわいそう」はいわば「上から目線」だと思うのですが、その言葉を使う子がほとんどいなかったのが印象的でした。むしろ模造紙には、体験コーナーで入所者が工夫してつくったボタンをかける道具を使って、素直にその工夫や生きることのすごい力に心動かされたようすが反映されていました。

一方で入所者が、故郷から引き離され終生帰れなかったことを重く受け止めて、故郷が見えるように土を高く盛り上げてつくられた「望郷の丘」や、入所者の手で育てられた「人権の森」を制作のテーマに選ぶグループも複数ありました。「望郷の丘」の作品は、たんに高さを再現するのではなく、そこで過ごされた療養所の人たちの時間を表現するものでしたし、「人権の森」の作品では、故郷を想って植えられた木をモチーフにするなど、自分たちに近い感覚で表現されていたと思います。彼らはどちらかといえば言葉で表出することが苦手な子供達で、感想を書いてもらっても「すごい」とか「良いと思う」といった簡単な言葉にしてしまいがちですが、作品を見ると、すごく考えた結果が形になっていると思います。

宮下「この、最初の授業のみんなの気づきを書き出した模造紙は重要でしたね。図画工作の時間ということもあって、早くつくり始めたくて、話し合いもそこそこに走り出しちゃう子もいるわけですね。そこを「まあまあ……」と押しとどめるのが、大人のスタッフの役割だったというところもあります。誰かが描きとめたことをきっかけにして、ほかの子の発想やアイデアが広がる場面がたくさんありました。見えるようにするということは大事ですね。

私が参加した二つのうちの一つのグループは言葉の少ないグループでした。でも趙さんの写真集の中に、包帯でぐるぐる巻きにされた入所者の腕に鳥が一羽留まっている写真があり、「この鳥は何しに来たんだろうね」と問いかけると、なかでもいちばん口数少なかった男の子が、「故郷から会いに来たんだよ」とポロツと言った。それまでずっと沈黙の、誰も何も言わない長い時間があった、そこでようやく出てきた言葉でした。このグループは結局「森をつくろう」というテーマで、「人権の森」の再現ではなく、療養所の人たちにとっての森の意味を考えながらつくるとい制作になっていきました。

「山吹舎」では軽症の独身男性患者が、一二畳の部屋に八人も住まわされていました。療養所では燃料となる薪を森から採ることが厳しく制限されていましたから、自分たちが暮らしやすくするために、彼らは夜中に園内に採りに行って天井裏に隠しておく。そのための屋根の穴で、子供達はそれをよく憶えていて、そんなところから制作になっていきました。

もう一つは「四季」を表現したグループでした。山吹舎で走り出しちゃった失敗を反省して、このグループではがんばって話をしました。これも言葉にすることが得意なグループでしたから、見学で気になったものごとをそれぞれ模造紙に絵で描いていく中から、木の話が出て、四人いるから四季をつくろうという話になっていきました。今と比べて雪深い療養所の風景など、昔の写真を見ながらつくっていきました。「図工の授業じゃなくて道徳の授業みたい」という感想が子供達から上がるくらい、きっちり話をする時間がとれたことは良かったと思います。

有蘭「山吹舎の作品、面白いですね。山吹舎の「穴」は、当局による厳しい監視・管理体制と、それをはぐらかして生活の便宜をはかる入所者のたくましさ、この二つのことを同時に象徴的に示している。この「穴」は、



並行する二つの歴史が交差する地点なのです。それを確に捉えて、伸びやかに作品化している。先生方と子供達の着眼点には鋭いものがあると思います。

前田―僕が担当した二つのグループは、二つとも死に関係したテーマでした。

一つのグループは趙さんの写真集をみんなで黙ってめくりながら、言葉もあまり交わさなかったのですが、最後のホルマリン漬けの胎児の写真がかなり衝撃的だったようです。どうしてこんなことが……という思いから、差別をどう考えたいのかという話に展開していきました。制作は、やはり趙さんの写真集から、愛されて大切に葬られた動物たちに比べ、患者自身の骨は小さな湯呑みのような容器に入れられ、納骨堂に納められるだけというギャップに、「これはおかしいんじゃないか」という怒りから、お墓をつくろうということになりました。

この授業に参加していて、全部自分に返ってくるような感じで、今もそれを引きずっているのですが、非常に疲れました。

河野―「お墓と墓」と題されたこの作品は、納骨堂を内側からライトアップして骨壺が見えるようにし、その隣には猫の墓が堂々と建っているというものになりました。この交流授業の展示は学内で二週間にわたって行われ、とても不思議な風景をつくっていました。子供達は表現しきったと思っっているでしょうけれど、学校の先生方には「通るたびに怖い」との声が……。授業に関わっていない人から見ると、とても違和感のある展示だったんだろうと思います。

宮下―子供達は同じ時間をトレースしてきたためか、他のグループであっても、その作品を「怖い」とは言いませんでした。

差別に関しては、この授業を始める前に大人だけの打ち合わせの際に、標語集のように差別はいけない、差別をやめよう、みたいなことが出てくるかもしれないと危惧する場面もありましたが、少なくとも差別の良し悪しにはとどまらない、もっと深い眼差しが生まれた部分もあったと思います。

滝本―私が参加したグループは、見学のと、先生が子供達のいろんな思いを引き出したのだと思います。そのせいかいろんな言葉が出てきました。入所者の方々が失ったものを言葉でどんどん挙げていって、故郷を離

れるときに別れてきた親や兄弟などの家族、ホルマリンに浸けられた子のように生まれなかった自分の家族があり、一方全生園には同じ病を持つ仲間としての家族があり、そこには三つの家族の「像」があることに、彼らは気づいていきました。

そんなふうに思いついた言葉をたくさん上げていって、それを入所者たちが園内で育てていた畑の作物と重ね合わせながら紙で制作し、その葉っぱに自分たちが上げた言葉を書いていくという作品です。このグループは言葉を見つけ出すことが上手でしたので、「言葉の畑」はうまくまとまった表現になったと思います。

もう一つのグループは竹を組んだ格子からぶら下がる包帯に、趙さんの写真集から気になった作品をコピーして貼るという作品です。最初は園の鎮守様として入所者たちの手で作られ、子供達が見学の際にお参りをしてきた「永代（ながよ）神社」をつくりたいと言っていました。なぜ永代神社なのか、入所者の人たちはそこで何を祈ったのだろうか、今の私たちは神社を前にして何を思うのか……と考えを進めていくうちに、「忘れない」という言葉が出てきました。

そこから「忘れない写真館」をつくろうということになりました。写真をどう展示しようかと考えたときに、子供達は、汚れた包帯を何度も洗って使っていたということやちゃんと憶えていて、それでぶら下げた包帯に展示することになりました。なかなかスタートの遅いグループで、最後にバタバタとつくった感じてした（笑）。

有蘭―そうですね。経験を抽象化する作業を経ていることが、それぞれの作品を見ているとよくわかります。先ほどの「お墓と墓」という作品はすごいですね。何がすごいのかというと、隔離政策下における人権侵害の実態を、決しておおげさな私たちではなく淡々と捉えて表現している。ハンセン病療養所に一度収容されたら、死ぬまで帰れない。骨になっても帰れない。療養所内で飼われている動物は手厚く治療されるのに、人間である入所者にはろくな治療がなされない。ハンセン病療養所入所者が経験してきたやるせなさや怒りに、子供達がきちんと向き合っているのが伝わってきます。

宮下―子供達は、見てきたものを再現したいという志向があるようです。でもそれはある意味で楽なことであって、もう少し考えれば、ただ再現することではない表現が生まれるのではないか。それは経験を平行移動させるのではなく、それぞれの子供達の身体を通過して昇華させる作業

と言ってもいいかもしれません。そういう作品や表現が生まれると良いと考えていました。粘り強くその過程に伴走することは、大人にとっても、全生園の体験だけでなく、体験を血肉化させることについて考えさせられましたね。

●負のできごとを記録し、残していく難しさ

宮下―もうひとつ、この授業に関わる中で今後私たちはハンセン病の問題とどう向き合っていたらいいのか、入所者が高齢となり減り続けている今、療養所は今後どうなっていったらいいと思うのか、あるいは私たち自身は、私たちの人生で今後遭遇する困難にどのように立ち向かっていったらいいのか、今回の授業を経験してそれぞれ考えたこともお話しいただけますか。

前田―今回療養所に初めて行き、文献を読んだり、昔の地図をトレースして

描くことをとおして、療養所の今後のあり方を考えさせられました。ただ壊されたり、たんなる記念公園になるのでは、入所者の生きざまを残すことにはならないのではないかと思います。確かに私たちの負の遺産であるわけですが、有蘭さんが本で書かれたような文化があった。そうした文化は今後どのように保存されたり、伝えられたりされるべきなのか、と……。

有蘭―場所の記憶の継承の問題ですね。これはとても重要な問題だと思います。同じ過ちを人類が繰り返さないように、隔離政策に起因する悲劇や人権侵害を象徴する場として、つまり「負の遺産」としてハンセン病療養所を保存する活動はもちろん必要です。

しかし、悲劇や人権侵害の現場という側面だけが、日本のハンセン病療養所のすべてではありません。日本のハンセン病療養所の特殊性は、それが長い年月にわたって人々の「生活の場」として存続してきた点にあります。それは具体的な場所を手がかりとして考えることも可能で、たとえば



多摩全生園なら「望郷の丘」や「人権の森」「永代神社」などを挙げることもできます。

こうした「場所」として目に見えるものとは別に、「できごと」をどのように記録に残していくのか、という問題もあります。形として残っているものだけでなく「できごと」をどのようにして残していくのか。この点についても、場所の記憶の継承と同じように、どの側面をどのように残すのか、ということが問題になってきます。この問題についてはさまざまな意見や立場があります。私自身は、人生の大半を療養所で過ごしてきた人たちの「日常」を描くために、被害者としてのハンセン病者ではなく、生活者としての彼らの姿に焦点を当てて記述を行ってきました。

たまに誤解されてしまうのですが、こうした記述の方法をとるからといって、差別や人権侵害の実態が隠れてしまうことは、まずありません。こうした記述の方法をとることによって、結果的に、彼らの受苦の経験が思わぬかたちで浮かびあがってくることもあるのです。

宮下「できごと」を残す、ということはとても難しいですね。とくに、目に見えにくい、たとえば、生活の中に自治をどのように育んだかといったことは、人間の根源的な可能性を示すものでもあり、大切なことです。が、経験していない人がわかる、理解できるという状況をつくることはとても難しいですよ。

吉田「有蘭さんの本を読んで初めて、療養所の人たちの生活を知ることができました。療養所に見学に行っても、自分たちと同じように生活していたという感覚はなかなか伝わってこない。それが残念です。大人がちゃんと話して伝えるとか……。有蘭さんのように、知識や肉声を伝える仕事をする人がもっと増えてほしい。

有蘭「ありがとうございます。私は、療養所入所者の日々の暮らしや、かつて彼らが共有していた生活の呼吸のようなものを、できるかぎり丁寧に描いて伝えるよう心がけてきました。なので、そのように言っていただけでとても嬉しいです。

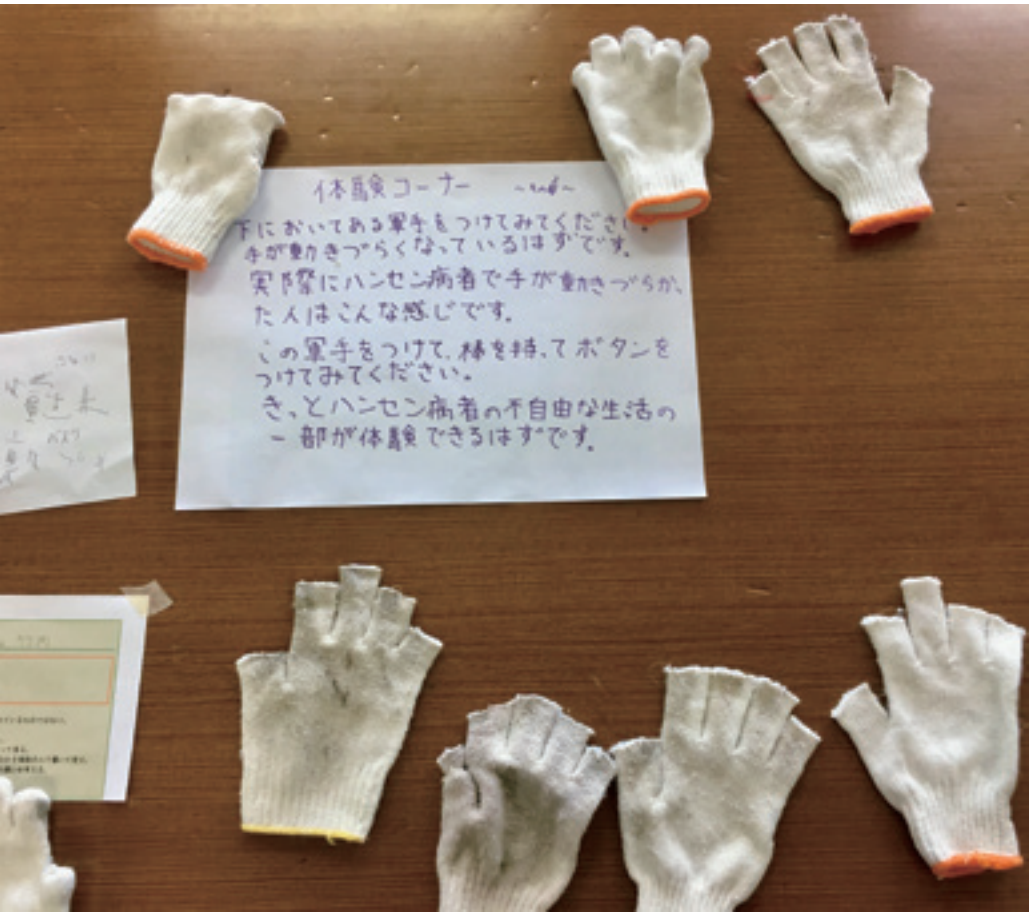
吉田「療養所の文化活動や社会的な活動は、主に男性がやっていたんでしょうか。

有蘭「療養所全体の男女比は一对一ではなく、男性の人数が多いです。そ

す。子供達自身が考えて、療養所の話を自分たちのいじめの問題に引きつけて感じることはあっても、大人の意図でリードするべきではないと、そういう違和感は強くありました。

一方子供たちはボタンかけの道具や義足の展示を見て、限られた環境ですごいことができていることは気づいているし、療養所の方々の生活を身近に感じ取ってものとも思います。そういうことをきっかけにして、「そこで起こっていたこと」を人間としてわかっていけるし、育まれた文化のすごさも、もっとダイレクトに伝わるんじゃないかなと思います。

有蘭「パッケージ化された外側の部分、表面だけをなぞって自己完結するのではなく、多様性を多様なままに感じつつ本質に迫ること。そのためには、勇気や根気が必要なのかもしれません。子供たちの作品はどれも、本



のせいか、作品の数もやはり男性の方が多いです。しかし、意欲的に創作活動に取り組んでいて、陶芸や文学作品などで独自の世界観を築きあげている女性もたくさんいらっしゃいます。そのような女性から創作活動についてお話をうかがっているときは、とても楽しいです。瞳をきらきらと輝かせて、生き生きとした口調で、作品について語ってくださいます。

石井「私は見学の後で有蘭さんの本を読ませていただいたので、先に読んでいれば子供達との関わり方ももう少し変わったのかな、と思います。

本を読んで、療養所の人たちは望まない状況に追いやられた中で、何とか自分たちの生活を創ってきたということがわかりましたが、残念ながら全生園の展示ではそれが伝わってきませんでした。入所者が自分たちで結成したハーモニカ楽団「青い鳥楽団」の展示も観ましたが、全盲で手も不自由な人たちが奏でる感動的な音楽……という印象で終わってしまふ。やはり物語がないとちゃんと見えてこないのだと思います。療養所を、物語のないたんなるモニュメントにしてしまうことは、とても危険だと感じます。

有蘭さんの本で印象的だったのは、らい予防法の継続を主張した医師が、療養所にドラムセットを寄付をしていたという話でした。ものごとは決して一面的ではないし、そこにはさまざまな物語がある。私が関わった子供達の反応は、「ヒドイよねー」、「そんなの脱走するに決まってるよ」、「そうだよねー」と、すごく軽いものに感じられました。けれども子供達は、彼らの経験の中で素直に受け止めていたに過ぎないんですね。とすれば、もう少しちゃんと物語を伝えていかなければいけないのではないかと思います。

有蘭「おっしゃるとおりだと思います。断片的なエピソードやモノだけではなく、物語があって初めて可視化される真実や歴史もあります。拙著の中から例を挙げると、今、石井さんが言及してくださったような医師や療養所職員の姿、あるいは療養所内の創作活動の意味などがそれにあたるのかもしれない。

河野「情報があふれる社会で生きている子供達は、見学に行ってもそこにある情報をスルーしてしまふ傾向があります。子供達が受け取る全生園で提供される情報の中には、療養所の話といじめの問題を直結してしまふ恣意的な印象を持つものもありました。確かにいじめは子供達の身近な問題ではあるのですが、療養所の話と短絡的につながるものではないと思います。

質的なところをちゃんと捉えていると思います。そこに至るために、先生方やスタッフのみなさんがご尽力なさっていたことも作品から伝わってきます。

宮下「一見やんちゃなグループで、展示もさっと駆け抜けていったように見えるけれども、ちゃんと見るものは見えているんですね。

彼らは療養所の人たちを、ひとくくりに「かわいそうな人たち」とも言う。でも、全生園でも紹介された『てっちゃんハンセン病に感謝した詩人』（権徹著、彩流社、二〇一三）という本には「らいになって、よかった」という帯がついていて、「どうしてよかったと言っているんだろ」と問いかけると、らいになったことで、らいという病気のつらさや差別されていることを社会に伝える役目を負うことで、自分は役に立っている、だから良かったと言っているんだと、ちょっと小賢しいことも言う。で、まわりの子たちもうんうんと頷いている。「じゃあ君がらいになったらどう」と聞くと一瞬立ち止まって、「オレ、イヤだ」と言う。そういうところで、ものごとは一面的には見られないことを見出していく。

そんな彼らの作品は「うれしさとかなしさ」と題され、背中合わせにしたイスと、趙さんの写真や自分たちの言葉を天井から吊り下げた、教室一つをまるまる使った大きなインスタレーションで、今回の経験を多面的に捉えようとするものとなりました。

何かしらの対話や問いかけがあれば、子供は自分たちで見出していく力を、十全ではないけれど持っていると思います。ですから有蘭さんが、書くのがためらわれるとおっしゃるような、生き生きとした人としての営みが、当時の法律で非合法であったとしても、伝えていかないとリアリティが失われてしまつて、伝わることも伝わらなくなってしまうのではないかと思います。

●この世界で、たくましく生き続けていくために

有蘭「私自身も、もう少し勇気が必要なのかもしれませんね。ハンセン病当事者や療養所職員が語ってくださることの中には、本や論文として公表することがためらわれるようなことや、どのように書けばいいのか戸惑うことが、たくさんあります。

河野「授業後の子供達の感想は、「体験できて良かった」というようなす

ごく軽い言葉で書かれていましたが、自分たちのこととして実感をもって捉えられるかどうかがすごく大事なことだと思いました。

清水「僕は「四季」の制作に参加しました。今の子供達はネットで調べることが多いのでしょうけれど、今回は実際に全生園に出かけて、入所者のお話も実際に聞けたことは貴重な体験だったと思います。今回はうまく表現できていなくても、心の中には残っているのだろぅと思います。僕たちの社会には部落差別の問題などもあって、今でも親の反対で結婚できなかったという話も聞きます。それを乗り越えられるかどうかは、こういう問題を考えたことがあるかないかでも大きく違ってくるんじゃないでしょうか。そういう意味でも、今回の経験をちゃんと心に残していつてほしい。

ハンセン病や療養所の生活については、それを語れる人、知っている人がどんどん減っていくでしょうから、それを残していくことは貴重だと思っています。

有菌「確かにそうですね。今回の制作体験と、子供達が成人になってから直面するさまざまな問題が、彼らの人生の中で交差するときにくるかもしれない。

日下「すごく今、いろんなことが頭の中に渦巻いています。たった今考えていたことは、今の子供達も、ハンセン病で限られた空間に隔離された人々と同じだな、と……。今の子供達も、親の愛情や管理という見えない壁に閉じ込められていて、何の工夫もできないまま生きている。子供達も療養所の人たちのたくましさは感じ取っていて、差別に対する怒りもあるでしょうけれど、そこにはたくましさも見出している。今の子供達にも、生きることに対してたくましくあってほしいと感じました。できた作品を見て、それぞれの感想を聞くと、すごく心が揺さぶられる。

宮下「人間にとってつくることってどういうことなのか、ということですね。つくることは人間が生きること、何かを問うことにそのままつながることだと思います。図工はとても大きな可能性を持っている。それから、療養所の方々が暮らしの中に、苦しみとともに多様な表現を見出していたことも、難しい言い方ですが、人間の可能性を感じます。そして、尊敬っていうか、表現とは、人権を考えることともとても深くつながることだらうなと思います。

伊東「三年前まで東村山市で小学校の教員をしていて、全生園の見学には積極的に参加したかったのですが、小学生には難しいから、と、学校側はあまり乗り気ではありませんでした。三年目によりやく実現して子供達と全生園に行き、語り部の平沢保治さんのお話を聞いたのですが、非常に過酷な体験をされていながら、子供達に夢を与えたいとおっしゃっていたのがとても印象的でした。今回の授業では感じたことを表現することで、いろんなことがわかったり、広がったりする、素晴らしい授業だと感じました。

河野「私も最初は、「人権の森」のどこかに何かをつくってみようというような授業になるのかな、と考えていました。けれども結果としては、子供達が感じたことを自分たちなりに表現できた授業となりました。私が関わったグループは二組とも「望郷の丘」をテーマとしましたが、「望郷の丘」を使った楽しいプランというようなものではありませんでした。一組は、故郷が見えるようにとつくられたその高さを、学校の校舎で、それをつくった想いととも伝えたとい、「二〇mのハシゴ」で表現しました。もう一組は故郷を想う場所を抽象化して、イスのある箱の部屋をつくり、自分の好きな色の光を灯して思いがはせられるような作品をつくりました。「望郷の丘」を自分なりに咀嚼して表現できたことが良かったです。

子供達にとって今回の経験は大きいものでしたが、これを次の年にどうつなげていくかが、今後の課題だと考えています。学校としては、全生園のある東村山市でさえ取り上げるのが重いテーマでもありますから……。

宮地「今日のお話を聞いて、この問題を体験化してしまっているのかどうか、非常に複雑な気持ちでいます。私自身も何度か全生園に招かれ、当事者、研究者とも会い、青森でハンセン病の市民集会で話をするなど、ハンセン病の問題には深く関わってきました。法的には解決がついて取り上げやすくなっていますが、社会的には学校側もあまり扱いたくない問題であるという、その際（きわ）にあるテーマだと感じました。

まず、ハンセン病はみんなにとってすごく遠い存在なんだなと感じました。誰も自分の親族にハンセン病患者がいる可能性を考えもしない。また、当事者の方たちにアイデンティファイしてモノをつくっていくことも良いけれども、一緒に生活している職員の関わり方がスッポリ抜け落

日下「パッケージとしての学校の授業に風穴を開ける、すごいプログラムだと思います。

河野「開けちゃって、その後どうしよう……というところですよ（笑）。日下「パッケージ型の、感想を書きました、差別はいけないと思います、で終わってしまう授業ではなく、子供達も感動するし、それとおして大人たちも考え直させるような、そんな授業だと感じました。

有菌「今、宮下さんがおっしゃっていた「人間にとってつくることってどういうことなのか」という問いに関わることなので、療養所の創作活動についてここで少し補足させてください。

かつての療養所には十分なモノや労働力が支給されておらず、入所者は自分たちで宿舎を建てたり仲間を看護したりしていました。つまり、すべて自分たちでやるしかない、という状況でした。だからこそ創造力を働かせて、さまざまな生活道具をつくった。たとえばボタンかけや、拙著で写真を掲載した喫煙具などがそれにあたります。病で失った手指の機能を補うため、入所者はさまざまな生活道具を考案し自分たちでつくっていました。

生活道具だけではなく、娯楽に関しても同じです。かつての療養所には、テレビやラジオなんてなかった。療養所に閉ざされているから、書店に行くことも映画を観に行くこともできない。本も雑誌も情報も入手できない。音楽も聴くことができない。だからこそ、自分たちで楽器をつくり、演奏技術を磨いて音楽活動をした。小説や詩をつくって、お互いにそれを読み合った。お互いの後遺症を補うために協力しながらつくるので、作品はおのずと共同制作になることが多かった。病によって視力を失った入所者が大勢いるから、作品は声に出して読むことが一般的だった。ときには看護師さんや職員さんも、一緒に歌ったり、作品を朗読したりした。自分たちでつくるしかない。そして、ひとりじゃなくて、誰かと一緒にやるしかない。どうせやるなら、少しでも気持ちが晴れる方がいい。これが、彼らの創作活動の原点にあるように思います。

入所者の方と一緒にいると、日常のふとした隙間にポエトリリーディングや楽器の演奏が始まるということがよくあります。生活と芸術の距離が近い。暮らしのなかに、人と人の間に、芸術や創作活動が溶け込んでいる。

私は、彼らの「つくること」に対するこうした気負いのなと、肩の力の抜け具合に魅力を感じています。子供達の作品は、その雰囲気をよく捉えています。さらにたとえば病としての異形性についてはタブーとして避けられているし、ほかにもまだまだ避けられていることもあるでしょう。せつかくある種の危険を冒してハンセン病を取り上げるのであれば、難しいですが、もっともっといろんな問題が考えられるのではないかなと思います。もちろん他では絶対にできない、非常に総合的なプログラムだったとわかったうえですが……。

宮下「本当ですね。この問題を体験化してしまっているのかどうかは、とても深い問題ですね。体験化するということは、ある種、固着してしまいうということにもつながる。もうひとつ、差別／被差別の構造をなかなか出られない、差別する自分のおののきのようなものをおして人とは何か？あるいは自分は差別しない人であるという構造に存在する差別、など、とても複雑な問題があると思います。それらを考える契機につなげるなどなど、できたことはたくさんある、これから考え続ける必要があることだな、と思います。

一方で、これを図工の授業で取り上げたことには大きな意味があると思っています。アート・表現⇨アウトプットと捉えず、今回は造形する過程を思索の過程と考えたいと思っています。伝えるということに重きを置くより、思索する過程の道しるべ、あるいは杖としての造形ではないかと。その思索の果てに出てきたものの、ことは、他者に見せる、見せないというより、本人の生きるうえでの「標（しるべ）」にもなるはず。

河野「学校の教職員や保護者に伝えたい、今回私たちや子供達がやったことを聞きたいという気持ちがありましたので、展覧会はあえて授業参観の日に合わせて開催し、地域の人たちにも見てもらえるようにしました。今回は保護者よりも、むしろ教員の方にさまざまな驚きや違和感、発見があったように感じました。もしこの授業を継続していくことができれば、また違った反応が出てくるのではないかと思います。（二〇一八年九月九日）

「座談」切実さをもって 切実さと出会う

宮地尚子（一橋大学大学院社会学研究科教授）

佐藤李青（アーツカウンシル東京プログラムオフィサー）

宮下美穂（特定非営利活動法人アートフル・アクション事務局長）

宮下―東村山市では、毎年、市内の小学生全員が授業の時間内に多磨全生園を訪問します。私たちはこの訪問の機会に、子供達が全生園の歴史とどのように出会い、受け止め、それぞれの人生の大切なできごととして醸成させていくのか、起こったことの本質を、この年齢なりに考えるためにはどうすればいいのだろうかと考えました。

そこで図工の授業の中で表現するという行為を通じて出会ったことへの理解を深めていくというプログラムを行いました。何かを表現しようと能動的になることでもっと細かいところや物事と物事の関係、なぜ？と思ったことの理由を知りたくなる、思考が深まったり、発見によって、また表現が更新される、「表現と思考」の関係の可能性について考えました。

もうひとつは、居住する人も少なくなり、今、全生園全体は公園として整備され、過去にたくさんの方々が暮らした痕跡がどんどん薄められているような気がします。生活の痕跡がどんどんなくなって、まっさらになって、漂白されて、ここでのできごとがなかったかのようになくなってしまっている気がします。記憶や記録は、当事者の方々の

名誉を回復するためというだけでなく、私たちが生きていくためにどのようなものであるか、考えたほうがいいのでは、と思っています。

●誰が何を残すのか、 どう伝えるのか？

宮地―誰が主体かですよね、記憶するのと記録するのと。当事者が記憶、記録したいと思うのか、次の世代が記録したいと思うのか、直接経験していない人が記録したいのか、目撃した人が記録したのかによってもかなり変わってくる感じはしますよね。

宮下―少なくとも起こったことを何かしらの形で残していったほうがいいかもしれないと考えたとき、誰がどのように残していくのがよいのでしょうか。当事者や関係する人、まったく経緯を知らない人など関係性はいろいろあるとは思いますが。それぞれの人によって受け止め方はちがうと思います。ただ、今の全生園を見ると、これまでの暮らしの様子は剥き取られてまっさらになって

いっちゃっているみたいな気がします。

宮地―まっさらになっているかどうかはその受け手によってもかなり変わって、あそこで一見無毒化されているように見えるけど、非常に生々しく感じてつらくなる人もたくさんいるのはいると思うんですよね。だから一概に無毒化されているとも言えない。うーん、難しいところですよね。

例えば『はだしのゲン』を昔読んでいまだに悪夢になって出てくると言う人や、沖縄に修学旅行に行つて壕に入ったり、記念館の展示を見てすごくショックを受けて、つらくて仕方なかったという子もいて。それでもう見たくないと思う人もいます。なかなかそこは、受け手の感受性とタイミングが大きいですよね。

受け取ったあとにそのままためるんじゃないで、それをどう表現するかとか、次にどう伝えるかですよね。例えばレポートを書くなり、何らかの振り返りの時間があるかないかとか、自分のショックをほかの友達にシェアできるかどうかとか。シェアしてそれが受け入れられるかどうかとか。それでも変わってきますよね。

宮下―受け取ったあとにどのように行動するかによって、その人の経験の質は変わってくる気はしますね。

宮地―たぶん小学校では、今までだったらレポートを書く、感想文を書くのが普通だったと思うけど、今回の南台小学校のプロジェクトに関しては、それをそのままではなくて、また次の何か作品にしていくというのは面白い試みではありますよね。五感すべてを使ってやっているし。直接見ないけど、梯子を屋上から吊り下げたものは興味おかいですね。



山城知佳子《あなたの声は私の喉を通った》上映風景
二〇一四年アートスポットシャトー2Fにて

宮下―「望郷の丘」がとても気になったチームの子たちですね。「望郷の丘」はどのくらい大きかったんだろう、そこからはどんなものが見えたんだろう、ふるさとと見えるのかな？という話から、「二〇mの高さ」を学校の中で探しました。どうも三階くらいの高さらしいということになって、校舎をつかって一〇mの高さを表現しました。登るということを考える意味で、一〇mのはしごを作ってくれた。造形的にもきれいだったね（O.T.頁）。

宮地―ある種の追体験というか、ずれて追体験していくわけですよね。どういうずれ方があり得るのかの幅が広いと面白いと思うし。選択肢というか。そのままだっていうのは無理な話で、ずれなきゃいけないし、ある種、編集しなければいけないわけですよね。

山城知佳子さんの作品《あなたの声は私の喉を通った》も、山城さんはおじいさんとまったく同じ経験はできないけれども、山城さんが口パクをして、おじいさんの戦争体験の音声が流れることで彼女の身体を通して一度証言が咀嚼される。「ろ過」されるとき「消化」されるときもあるかな。消化しきれないものだけ。そういうものが表現され、その表現を受け止める人は、おじいさんの表現と、また全然違うものを受け止めているわけですよね。

もとのおじいさんの語りがオーセンティックな、真正なものだから、それが一番伝わるのかというところではなくて、彼女がそういうことをすることによって別の受け手側も、また自分の体を通して感じるみたいな装置になり得ますよね。

宮下―一般的に博物館で展示された写真や証言のパネルを見ても、なかなか実感がわかないことが

多いかもしれない。でも山城さんの作品を見ると、実際に起こったことの歴史的な価値とか意味が、山城さんと同じ実感をもってわからなかったとしても、どうもこれはひどいことらしいとか、すごいことらしいという強さとか、何かしら伝播してくるものがあつたりするよね。

宮地―今は、情報はいくらでもあるわけですよね。ネットで検索したりすれば、ほんとに限りなく情報は得られて。今YouTube見たら、面白い映像作品なんていくらでもあるじゃないですか。そこにちよつと生身性の伴うインターラクションがあると、飛躍して理解力っていうか、伝達性が増すような気がしますよね。

宮下―全生園を訪れた人と居住者、あるいはアーティストと鑑賞者の間の対話、その対話も、面と向かって言葉で感想を語り合う、情報交換みたいなことだけでなく、それぞれの人のいろんな内省や想起するものがあると思います。目の前の相手する人との対話、自分自身との対話など重層性はきつとすごく大事だろうと思います。

宮地―引っかかるものがあるといいですよね。スルーンとするんじゃないで、何かもどかしかったり。

宮下―立ち止まることとかね。

宮地―飲み込めなかったり、ちよつととげが刺さっているような感じとか、そういうのが出るとそこから次の何かがおきそうな気がしますね。

大西暢夫さん「＊」の『水になった村』で、ダムに沈む前の家を整理している写真があつて、柱が折れるようにしてあつたんですよね。私、なぜかわからなくて、大西さんに質問したら、「それは補償金をもらうためには、全部きれいに倒さ

なきやいけないから」と言われたんです。何か引っかけたから質問ができて、質問したからそういう答えが返ってきたわけです。違和感を感じながらも流していたら、大事なことを見過ごすことになっていた。

「＊」大西暢夫（おおにし・のぶお）写真家、映画監督。ダムに沈む岐阜県徳山村の取材を独自に開始する。その後今に至るまで全国を巡りダムに沈む村を追い続けている。そのほか精神病院閉鎖病棟、東日本大震災被災地、糸を紡ぐ長野のおばあちゃんなどいずれも終わりのない長期取材を続けている。

●受け取る、ということ ――誰かの経験を身体に入れて語り直すこと

佐藤「経験や言葉が増えると、いろいろなことを語れるようになる。その一方でいろいろなことを聞けるようになるのかなと思うんです。最近戦争のこと、たとえば『原爆の図』や、ほかにも大西さんの『水になった村』の徳山ダムの話が、自分の中ですごく聞ける感じになっていくんです。これは震災を経験して、東北に関わる事業にずっと関わっていたことが影響しているんだと思います。東北の状況を見てきて七年経って、ほかのできごとがすごく気になり始める時期になっている。震災以外の話が東北の風景に重なって見えてくるんです。この前、福島避難エリアでは、家を壊す時期になっているという話を聞きました。壊す業者が足りなくて、みんな順番待ちになっているくらいに。その風景とダムに沈む村の写真が似ていたりする。そうすると、そのダムの話が聞けるようになる。

今までも聞いていたことだったんだと思います。それが身体に入ってくるようになった。それは図らずも震災があって、その体験があったから

も、木を見ても多くのことを思い出すかもしれない。けれども、全生園のことをまったく知らない世代がどんどん増えてきたときに、過去との脈絡も関係性もないかに見える緑地やハンセン病の人が住んでいた建物を全部壊した更地がいったい何を伝えることができるのだろうか、というのが一つ。

もう一つは、そこを更地にしたいという意思は何なのだろうということです。何となく、ここで起こったことを後世の人にはわからないようにしてしまいう意思も、どこかにあるのかなという気もしたりして。

少年少女舎というハンセン病の少年少女が住んでいた建物があるんですよ。ちっちゃい子供がいたその建物がもうほんとに朽ちていくこうとしているわけなんですけど、更地になってしまえばそこにあった暮らしみたいなものは伝わりにくい。「少年少女舎跡」みたいなステンレスの看板が立っていたとしても、いったい何が伝わるのかなあ、と思います。

宮地「少年少女舎っていう、その名前だけで作品になっちゃうというか（笑）。それは写真とかはもちろん誰が残しているんでしょうね。

宮下「ええ、岩波写真部が撮った遊び子供みたいな古い写真は見たことはあります。たぶんあまり新しい写真はないだろうね。岩波写真部の撮影したものは子供が着物を着ているから。

この間行ったら、もう全部にブルーシートがかかっていて、クリストの作品みたいになっているのね。壊すということだと思ってるんですけども。壊さないまでもああやってブルーシートをかぶせておいたら、加速度的に朽ちていくと思うんですね。雨を防いでいるという言い方かもしれないですけども、すごいスピードで朽ちていく。

だった。でも、そもそもそうした経験を自覚的につくるのは、どうすればいいのか。それは、あるできごとの継承にとって重要なことなのではないか。そして、そこには表現の強さみたいなものが必要になってくるのではないかと思うんです。

東北で震災を伝える施設ができ始めている中で、その強さは一方で悩み種でもあるんだとも思うんです。せんだい二メモリアル交流館という仙台市の施設では震災のことを直接的に伝えるような展示はしないという方針があると聞きました。それはその施設が仙台市で最も津波の被害が大きかったエリアにあるので直接的な展示によって「思い出してしまいう」人がでてくることを懸念しているんだと思います。

一方で同じエリアでは、被災した小学校を震災遺構として残しています。その遺構は震災を直接的に伝えるものとして残し、展示施設は震災があったことを、あまり生々しく伝えないという役割分担のようなものがある。

その施設の方は悩んでいました。時間が経てば経つほど、経験してない人に伝える必要が生まれてくる。一方で、それを伝えてしまいうと近い人に「そういうふうに伝えなくてくれ」と言われてしまう。どういうふうにやっていけばいいのかっていうのは難しいと思います。ポツと火が見えると、横からフツと消される。そなたとえも聞きました。

宮地「何が？

佐藤「この場所でこれを伝えればいいんだ、と思って、目に見える小さい火をポツと立てると、近い人に横からフツと消されちゃうと言っている。近い人に横からフツと消されちゃうと言っている。吹いて消す気持ちもわかるから、何とも言えない。でも、その火を立てないと、ほかの人が集まってこないし、見てもraisない。そこがすご

宮地「痕跡をどうやって抹消していくか、という話ですね。ケネス・フットという歴史家が、事件の起きた場所をどのように保存するかということとを分析していて、聖地化から抹消まで四段階に分けているんです（記念碑の語るアメリカ…暴力と追悼の風景）。抹消にも、わざと朽ちていくようにする方法や、更地にして痕跡を消してしまいうという方法もあると思います。でも、まあ都合のいいように残して、政治的に利用するということもあり、どれがいいとは一概に言えないんですけどね。

佐藤「あの場所が更地になっていくことで思ったのは、それを更地にする意思が問題というよりも、意思がなく更地になっていく怖さですかね。あの場所を更地にするのは、入居者がいなくなり、淡々と手続きとして、そこを書面上で決まって、なくなっていく。もちろん、意思がある人もいるかもしれないですけど、そうなのだとすれば、何か意思をもって、あの場所に関わろうとすることはとても難しいかなとも思いました。万遍なくいろんな人に伝えるというよりも、誰か個人がその経験を切実に自分に重ね合わせて何かを伝えようとしたとき、伝える強さって出るじゃないですか。でも、手続きや制度が強固だということとは、個人の意思が介入しにくい環境があるのかな、と。

みんなが共有可能なメッセージでしか、そうしたできごとを伝える手段はつくり得ないことがあるのだとしたら、それはどうなんだろうかと思うわけです。たとえば山城さんみたいな方が訪れて、回復者の語り直しの映像を撮りたいんだと言ったときにやれる場の状態なのか。余計なお世話ですが、そういうことが気に懸かります。

たぶんいろいろなものがあつたほうがいいんでしょうね、何かを伝えるといったときには。たと

く難しい、と。とてもイメージを喚起させる言葉でした。

宮下「どうすればいいんだろうね。そうだったらほんとに山城さんの表現みたいなものが、可能性がある？

佐藤「山城さんの表現のように誰かの経験を身体に入れて語り直すみたいなことは可能性があるんじゃないでしようか。

宮下「誰かの経験を身の内に入れる、それに呼応する自分の体験があって、深い共感ができるようになることかな。その一方で、子供だから何もわからないということでもない気がします。

宮地「でも、まだ震災から七年でしいう。まだ生々しいし、全然ポストじゃなくて、真つただ中の人が多い。かなり違いますよね。山城さんの作品はタイミング的に、もう消えゆく声を次の世代にっていうものだけだ。同じことをやっても、すぐそこに身体で感応しちゃうっている人がまだいっぱいいるのに、わざわざそれをがやるのか、みたいなふうにはなっちゃうでしいうね。

●場所そのものの力と記憶

宮下「全生園の場合、人が暮らしっていた建物がかんどん壊されちゃって、暮らしの痕跡はあまり感じられなくなっって、どこにでもあるような普通の公園になってしまっについて、かつてそこにあったもの、起こったことと現在の風景の文脈が接合しない。何かしらを経験していたり、この地の過去を知っている人たちが行けば仮に文脈が切断された公園になっていたとしても、石垣ひとつ見てえは遠くに届く言葉や強い表現だけがあればいいわけでもなく、むしろ、いろいろな立場の人がいるいろいろなことを語り得る雑然とした状況であることが大事なのではないかというか。そうすると全部が必要みたいな話にもなってしまひますが。

宮地「現実存在する場所って、やはり大事だろうと思いますね。例えばハンセン病の場合、当事者の方たちが文芸活動もやり、アート活動もやり、いろいろな音楽もやりっについて、ある意味である程度発信はできていた人たちだったので、その作品自体をもつと記録に残そうという動きもあると思う。

それと別のルートであの場所に行つてみた人が何を感ずるのかとか、全然違う視点から誰かが見るっについてのもとても大事な気はしますね。まあ異様な風景ですよ。あの住まいが並んでいるのは。場所そのものの力って大きい。

宮下「場所そのものの力は、私は、私はとても大きいと思うんですよ。そこに地霊じゃないけど、必ず何かしらの痕跡が強く残ると思うんです。それを更地にしてしまっって、二代、三代たってしまつたら、ほんとにそのこと自身もなくなってしまひうかもしれない。せめて物理的な空間がそのままあることによる、例えば説明の可能性であるとか、何かを感じ得るような可能性が残れば。人が存在したということはそんなに軽いことではないと思うので。その人がそこをいたという気配であるとか、残滓というか。そういうものが感じ得られる何かは残すべきなんじゃないかっって思ひますけどね。

もしかしたら、元施設長の銅像でも何でも構わないから、それでもあれば何かしらの存在感はあるかもしれない。あるいは、朽ちていくに任せて、その朽ちていくときに立ち会っっていくという



出会いもあるような気がします。そのためには場所が重要です。李青さんに行ったときに使われなくなった電話ボックスにヤブガラシが巻きついていましたよね。私は何よりも、圧倒的な不在の存在感、のようなことも考えました。しかも、この電話ボックスは、敷地の外とつながる電話ではなく、たぶん、この施設の中だけの言ってみれば内線電話、みたいなものなんですよ。

●暮らしを介してつたえること

宮地―私はほんとね、あそこはもう一回生まれたまちなってほしいなと思ってたんですよ。一〇年ぐらい前かな、ハンセン病に関わっている弁護士さんとか、市民学会の人たちに呼ばれて話をしていて。もちろんハンセン病のことは大事だ

し、その人たちがそこに居続ける権利ももちろんあるんだけど、でも、やっぱり新しいものが入っていないと活気や場所の生命力みたいなものはなくなってしまう。

その当時DVの被害者の人たちのシエルトーってなかなかないし、住む場所もないから、そういう人たちに使えるようにできないのかと。実は弁護士長さんに話をして、その人も「それは考えてもみなかったけど、そういう可能性もくはないね」っていう話をちょっとして。ただ、縦割り行政だし、活動をやっている人たちも当事者の人たちも、やはり自分たちの活動に一生懸命なので、マイノリティ同士がつながり合うとか、別の被害者の人がそこに入り込むっていうのは全然問題外みたいな感じもあったように。

何を言いたいかというと、もしそこに新しい母親と子供がいたら、もう全然風景が変わるし、

「以前は、ここはこういうふうに使われたんだよね」っていうことがあると、その場所が何かを引き継ぎながら、一見忘れ去られているように見えるんだけど、何かを伝達というか、受け渡しができたんじゃないかなと思って。頭の中でね、イメージしていただくといい。

宮下―それはすごく大事だよ。それはDVなのか、ハンセン病なのかという違いというよりは、人が生きることの存在が重さとか、大切さとか、大変さは引き継がれていくよっていうふうになっっていくと、ハンセン病なのか、DVなのかみたいな問題のもっとも基底にある、人が生きていくことの質量みたいなことは引き継がれていくとか、尊重されることになっていたら、それはすごく重要なことだよ。

宮地―だってあの場所は人が生きていけるために最低限のものは全部、インフラがそろえられた場所なわけじゃないですか。それを博物館にしていくなとかじゃなくて、そこにまた生きている人が入ると、その人がまた生きていけるようにインフラが維持されるという。

いろいろな形で新しい発展というか、ありそいな気はしたんですよ。生きていける場所って非常に限られていて。もっとラディカルに言えば、ホームレスの人が入っていつて住めるようにしたいとか、何でもあり得ると思うんですよ。強い抵抗を受けるだろうし暴論だと一蹴されるでしょうけど。

宮下―でも、そこに入所者の方が出て、隣に越してきた人とすごく仲良くなりましたとか、隣の方が子供をすごくかわいがってくれました、みたいな、その人の存在の残り方とかもあるじゃない？何か遺物になって、伝記に書かれるような括弧つ

きの元患者さんみたいなことだけではなくて、隣に優しいおばあさんが住んでいて、自分の子供を困っているときにかわいがってくれた、みたいな記憶の継承の仕方もあったりとかするじゃない？そこにその人らしさの痕跡みたいなものが引き継がれていく場所がある、場所になる、みたいなことがあったらいいなと思います。

私はアウシュビッツで建物や遺品に展示として出会って、そのメッセージ性みたいなものを実感を持って受け止められるだけの経験がない、圧倒的な距離を感じました。そういう意味でもさまざまな形で人を介してつながっていくみたいなこと、さらには詩や音楽、絵画などが伝えることの可能性も考えてもいいのかもしれない。

宮地―花を植えるとか、木を植えるとかでござまないで、ちゃんと動物なり、人間なりがそこで育つと、とっても有機的に何かが伝達されそうなのがしますよね。

佐藤―あの場所を歩いて、素朴にそう思いました。家が空いていて壊すんだったら、誰かが住めばいいんじゃないか。実際に住める状態もあるのだとしたら。それができないのは、「隔離がなくなって開かれている」と言っているようで、ある種の配慮によって逆に隔離が生まれている感じもあります。その場である経験をしてきた人たちが住むための場所です、ということが。開かれているならば、誰でも住んでもいいはずなのではないだろうか、と。

ただ、こういう論理が立つことの肯定的な側面も分かる気がするんです。そこにいる人たちがいかに大変な思いをしてきたか、という前提への理解がある。それが「普通」と地続きである扱い方をしてしまうと、あたかも、その前提を不可視化する態度になってしまう。それはそうなのだと思います。

います。

でも、あそこに人が住んでいないと、あの場所を歩いたときに感じる生活の空気は変わっていくんだろうなと思うんです。もちろん、生活の空気は、そう簡単には残るものではないし、変わっていくのも当然。それでも、人が暮らし続けることで、その場がもっている文脈につながりができる気がします。住む人が変わっても、ここはこういう場所だからという共通の特性を語っていくことが生まれ続けるというか。

たとえば、港町だと外からの人の往来が多い場所だから、そこに住む人の気質が開かれているみたいな話があるじゃないですか。ほんとにあの場所が開いたら、どういう語りになるかわかんないですけど、ああやって人が住み続けてきた空間の感じは、そこへ住もうとする人たちに決してフラットに伝わるのではなく、何て言うんでしょかね、場の力が、そこでの文脈を継承するような集まりを生み出す気がするんです。そうすることで結果的に何か伝えるべきことが残るんじゃないかっていう…。

宮下―それは伝えるべきことは何か、残るものは何かっていうのを、第三者がフォーマットするというよりは、もしそういうふうな共同性が成り立つとしたら、そこに住んだ人が、「元患者の何と皆さん」みたいなのではなくて、隣に住んでいた優しい、あるいはいじわるなおばあさんがいてさ、いつもなにかいじわるされてさ、みたいな残り方もあったりして。ここはこういうとこだったんだよね、みたいな。壊してしまっって、ゼロから新しい建物を建てて、さあ、暮らししてください、というのではなく、小さな痕跡を身のうちに取り込みながら、暮らしが続いていくということはあるかもしれないね。人が生きていくってというのはそういうものが折り重なっていくことであった

りするので、そうならない、ということはまだそこに厳然と、ある意味差別があるということなのかもしれないし。

宮地―すぐ象徴的だなと思うんだけど、あのとき私、目に虫が入って、取れなくて、目が真っ赤になって、水を流しても全然取れなくて。歩いていたらちょうど白衣の人が来たから聞いたたら、「病院機能はあるけど、住んでいる人、収容者のためだけだから」と言われて。病院機能やクリニックの機能も備えているんだけど、それも非常に限られた、ほんとに残っている人たちだけに向けてしかサービスできないし。そうすると医者も集まらないですよ。

地下鉄にハンセン病療養所の医師募集というポスターが出ていたんです。すごく格好いい、もうどんだけお金をかけたんだみたいなポスターが出ていて。ほんとにごく限られた人たちのための医師。もちろんその人たちのケアは大事なんだけど、それだけしかできないっていうのは医療従事者にとっても非常に寂しい話です。ほかの人と交じりながら仕事をする中でスタッフのほうも活気付けられるだろうし。もっと自然に交じっていけたら、違う記憶のされ方があるんじゃないかと思います。もちろん衝突なり摩擦は起きるんですけど。

宮下―ハンセン病資料館は元患者さんの名誉の回復も謳っていますが、現在の資料館の展示は、個人個人の名誉を十全に回復させているのかな？私は名誉の回復より、というか名誉の回復の基底的な部分に一人の人の尊厳を尊ぶということがあるはずで、それをより深く追求することによってもっと普遍的な課題に直結するはず、って思います。

宮地―展示も頑張っていると思うんだけど、頑

張れば頑張るほど息苦しくなっていくパターンという感じが、少ししますね。公的機関だし、いろいろな制約もあるだろうし、中のスタッフの人もいろいろ、ほんととはもったいなくしたいとか、あるのかもしれないですけどね。小学生も中学生も高校生も大人もみんな、知っている人も、知らない人もみんな、誰が行っても、まあまあ、大丈夫にっていうような、最大公約数的なことになってしまいうのかもしれない。

宮下―最大公約数になってしまいうのはやむを得ないのかもしれませんが、私は人が何かを知るとか、理解するっていうプロセスとはどんなものか、もっと考えることができるんじゃないかと思っています。ただたんにパネルを読む、遺物を眺めるだけでなく、今回の子供達の試みのように、手を動かしてみる、造形してみようという動機に基づいて何かと対面することで物事への理解や共感が変わってくることもある。もちろん、展示の中でいちいちそんなことはできないということはあるけれど、それにしても、行って帰る、だけではない、もっと人に合わせた展示、伝え方があって良いように思います。

宮地―せっかくなら全国の療養所を巡礼して回るとか、そういう仕掛けがあるといいなと思います。促してみたいのが。

佐藤―もし広い人に伝えることが目的なのであれば展示の施設は、あの場所でなくてもいいのではないかと思ったりもしました。もちろん、あの場所にある意義はあると思うんです。多磨全生園が隣接しているという。一方で展示内容は多磨全生園の話だけじゃないですか。ハンセン病に関する国の施策等で被害を被った人々の「名誉の回復」を目的とした国立の施設として全国の状況を

●生活の痕跡にであること

宮地―一〇年ぐらい前に全生園に呼ばれて話をしにいったあとに、ハンセン病のことを研究している人と一緒に、まだ住んでおられた在日の女性のところにお茶とお昼しに行ったことがあるんです。そのときに縁側っぽい感じのところでした。べっていたのを今思い出しました。実際にそのときもまだ住んでおられて、その場所と一緒にお茶を飲むっていう経験は貴重でした。狭さもわかるし。行き来できて。別に格子があるわけでもないしね。でも何かちょっと隔絶されている感じとかよくわかります。そういうことがもう少し、何らかの形で伝達できると思いますよね。

宮下―今、入所者が少なくなっていて、土地の所有者である国が不在の建物をどんどん壊して公園にして、花や木を植えて、こざっぱり、こぎれいにしています。以前は住んでいた人が猫や鳥をすごくかわいがっていたり、自分の庭に一生懸命花植えしたり、野菜を育てたりしていた。植わっている植物も多様でした。それは結局、住んでいる人がいろいろなところから来ていて、郷里の風景への郷愁みたいなものでいろいろなものを植えていたということもあるでしょう。育てる楽しみもあったかもしれない。それはそこに住んでいた人の気配だったり、意思だったり、気持ちだったり、みたいなものの現れ出たもののような気がするんですよ。この、言ってみれば生活の痕跡みたいなものに、この土地に手を入れていくとする人がもっと向き合うべきだと思うですよ、そこにそういう人たちがいたのだということについて。

宮地―「生活の痕跡」という言葉がキーワードで



すよね。さっき「痕跡の抹消」と言っただけで、それって物理的に考えがちだけど、もうちょっと生活臭がするようなこと。例えば調味料とか。

宮下「床板の古さとか、鴨居の低さみたいなものも全て身体的に訴えてくる装置だと思うしね。もっと丁寧に、微細に伝えるって何なのかということ、あるいは伝えられるべきことは何なのかということを考えてみる。

それから人が物事を理解する仕組みも考えてみるべきですよね。例えば今回やったみたいに小学生は表現してみることに取り組む中で、普段だったら気がつかないことにも気づいていくというようないいことがあります。表現してみるというプログラムは、アウトプットを出すということではないと思うのです。何かを表現したい、伝えたいという過程で、たくさんの方の気づきが広がる。だから博物館のすぐく受動的な展示や設えられたハンズオンみたいなことだけじゃなくてね。立ち止まって自分に引き寄せて深く考えるための、具体的にいうと生活の痕跡みたいなものを感得するために能動的になれる何かがあってもいいのかな。

佐藤「そう考えると「伝える」と思った瞬間に、ここである「生活」のようなのは伝えにくくなってしまいうちもあるのかもしれないですね。あの場所を歩いていて、植生が雑多なことが目につきますが、それは同時に、いろいろな人々がここにいたんだなという、ことを体感できる空間になっていった気もします。それはたんに「ハンセン病の当事者」という言葉で切り分けられないイメージを含んでいる。それは伝えるというより伝わってしまいうち。おそらく、それぞれが自分の暮らしをつくるために、親しみやすい故郷の植物を植えることで、結果的にグチャグチャな植生になっているわけじゃないですか。それは故郷がバラバ

宮下「それに触れることによって、もしかしたら、肯定感も表現できるかもしれないし、獲得できるかもしれないっていうのが、すごくその表現に課せられた大事なことのような気がするんですね。

佐藤「震災の後に、ある時期から「忘れない、忘れない」ってテレビで言うようになった。「忘れない、」って。そのとき思ったのは経験した人は忘れたくても忘れられないわけじゃないですか。むしろ、「忘れない」って言われている人は、それを思い出すこともなくなってしまうことが問題になる。そうしたとき、忘れないという号令をかけるだけでなく、適切に社会の中に思い出す装置みたいなものがたくさんあればいいのかなと思いますね。

ミュージアムのような装置は大事なんでしょうな、と改めて思ったりします。でも、そうした装置を使うには、そこに向かう動機も必要だったりするじゃないですか。ハンセン病資料館の来館者は団体の方が多いと聞きました。小学生とか、みんな社会見学で来ている、と。それは自ら来るつもりがなくて来ている人たちがほとんどともいえる。それはハンセン病にまつわるできごとになれる最初の動機をつくるのが目的であって、そのために、どういう経験を提供するかということはある程度考えねばならないことなんだと思います。

一方で連れられてくるのではなく、必要なときに自ら使うことができる、思い出す装置として、ミュージアムは可能性があるんだと思うんです。あるというか、そもそもミュージアムとはそう機能するものなんじゃないかなと思ったりもします。さっきの展示と場所の話とつながってくるんですが。

宮下「全生園には過酷な歴史があって、ものすごく深い悲しさみたいなものがあつたのだからと思

うであることも示している。人が集まって暮らししている空間の質は、そういう個々の生活の積み重ねというか、共通の何かで把握できないものが混在しているからこそ「生活」を感じるようになるのかな、と。それが、この空間は「こういうものだから」って言えてしまったら、逆に生活がないと感じるのかもしれない。

宮地「ジオラマとか模型とか、そういうのってわりとありがちだけど、それって怖いんですよね。逆に想像力を制限しちゃうという感じもあるし、物体化しちゃう感じもあり。

宮下「それを見たら何かしらわかったことになってしまいうち。

宮地「子供が模型を作っていたじゃないですか。あれ、けっこう怖くて、不気味な感じがしたんですよ。

宮下「子供達が全生園で行われたことを良いものというか、肯定的なものとしてとらえて作品を作っているわけじゃないということが作品に映し出されているということだと思っんです。見学のときもたくさんの方の話を聞き、現場に立って、その後大人に引き回されて趙さんの写真集や古い記録写真をみたり、入所者の方の詩を読んだりして、深く考え込んだ。そこからファンシーなものを作るわけがない。ここは辛かったのである、という思いによって作られているものだから、その想念はいろんな次元で表現になったり内容に反映される、表れ出ると思っんですね。だから「怖い」っていうのは、ただ下手とか造形が稚拙だということではないですね。

宮地「そうではない。

うのですが、何ていうのかな、まったく何故なのかわからない、それは私の妄想かもしれないけど、そこに立つと許容されているような感じもするんですね。よくわかんないけどね。それが悲しさの向こう側にある、それでも生きていた人たちの存在だったり、ときに発せられる優しさだったりする何かが残っているのかもしれないんだけど。非常に厳しいところだったんだらうけれども、歩いていて、何ていうのかな、忌的なあるいは恐ろしいとは感じはしないですね。

それは木の植え方一つとっても、プレートに名前がある人、匿名って書いてある人を、一つ一つ、ひとりひとり見たとしても、懸命に生きようとしていた何かしらを感じることで、私が何か許される感じがする。私の思い込みかもしれないけど。場所の意味だったり、機能だったりを考える、と、忘れないよというより、もっとシンプルな意味でそこについて、少し許されている感を味わう私、みたいな感じががあります。

宮地「まあ、アジュールです。アサイラムでもあり、アジュールでもある。生きている中でとても窮屈で息苦しくて、でも、そこに救いを見出しているかもしれない。何でしようね、血が通っている感じはしますよね。

宮下「そうなの、そうなの。そのことを一つのできごと、ものとか、ブツとか、空間ということではなくて、一つの全体として感じることのできるものであり続けることは大事なかな。例えば先ほどの宮地さんのお話のように、大変な時期にある人たちがそこに住まいながら、かつてのアジュール的なものを、今、必要なアジュールにしていく営みが重なっていくことは、それはそれですごく有効だとは思っています。

宮下「昔、山吹舎に住んでいた人たちは燃料がないからね、夜中に木を切りに行って、天井裏に隠さなければいけなかったけど、体の自由があまりきかないなかで、それを持ち上げるのがすごく大変でした、みたいな話をいっぱい聞いてきていて造形をしているから、子供達は張り切って作っているというわけではなくて、こんなひどいことがあった、ということを確認しながら伝えようという思いがあったかもしれないけれども。

でも、そこで何か伝わる可能性はあり得るんじゃないかなと思っんですよね。あの包帯が吊り下がっている作品もね。奇しくも南台小の先生が「怖い」と言っただけですが、ほんとに辛いものを作っているわけだから、怖くないほうがいいと思う。

宮地「それは極めてまともな反応ですね。今アールで言うと、二つの究極があつて、アウシュビッツ収容所的な生々しさというか、残されたそのものを展示するのと、もう一方アウシュビッツの塔だっけ、壁だっけ、ベルリンにある非常に抽象化されたホロコースト記念碑やリベスキントの博物館。そのどっちかの両極になりがちなんだけど、それと違う、もうちょっとクリエイティブな、何か辛さもありつつ、あつたかみもあるような、人間の体温が感じられるようなものがあるといいですね。



佐藤「その積極的な価値の語りづらさって何なんでしょうね。そこで苛烈な生活があつたというのとはわかつつも、そう感じるんだよっていう。今、宮下さんがしていたように、いったん保留を入れる語り方になってしまいうち。

宮下「私にはわかり得ないかもしれないっていう、逡巡のようなものは常にありますよね。

●「当事者」をめぐる問い

佐藤「何かを伝えようとするとき、当事者でなく語り得ないという壁が出てくるじゃないですか。とくに時間が経過することで、その経験をしていない人が伝えようとする段階に入ったときに。

宮下「当事者かそうでないか、ということももちろんあるけれど、生きてきた人たちに対して、私もただ生きている人として重なっていくという部分もあつて。だから小学生たちは比較的シンプルで、そこに生きて死んだ人を見てきて、その上に自分が生きていることがちゃんと重なっていつて、そこで応答ができていくような気がするんですよ。だからある意味、等価で、あなたも生きてきたけど、私も生きているという。説明しにくさや当事者性みたいな問題もあるけど、「でもあなただって生きているのよ、わかってよ」みたいな気持ちもある。そういう意味では、人としては等価で

ある。「私はあなたをわかりたい、あなたにも私をわかってほしい」みたいな。

佐藤「けっこう注意深くならないと等価にはならないじゃないですか。今回の宮下さんが学校の事業で感じているモヤモヤって、ハンセン病のトピックに触れたときに、どうしても「正しさ」みたいなものが出てきてしまうこともある気がします。それが生まれた瞬間に、自分のこととして捉え直すというよりも、その対象との関わり方の話になってしまふ…。

宮下「そうですね。「自分のこととして捉え直す」ということはとても大事なことのよう気がします。正しさ、になると、私は正しいという、与える人、に陥りやすい。なので、自分の持っている、自分の存在が抱える固有の問題と重なり合わない、どうしても「正しさ」「救う」とか「代弁する人」になってしまふ。それが子供にはあまり感じられなかった。

佐藤「何て言うんだろう。もちろん、今回の学校での取り組みは、最終的には自分の経験と呼応したものになっていると思います。でも、常にその「正しさ」がつきまとう感じがしてしまします。それはトピックの扱い方もそうですが、そもそも、そのトピックに触れることそのものが態度として「正しい」とも思えてしまふ。それは、さっきの空いた住まいが、ほかの人が住めない配慮と似ている気もします。あるトピックが負の経験として共有される強さを持つほど、それを触れようとした瞬間に社会的な正しさとみたいなのが忍び寄ってくるというか…。

宮下「そうそう。

係をみんながそれぞれに持っていたら。だから私はケヤキをケヤキと呼ばないプロジェクトというのを今、唱えているんですけど、なかなか受け入れられない（笑）。

宮地「名前を変えたら変わるよね。全然変わるよね。もう「ケヤキ」って言ったら、確かにケヤキで終わっちゃうものね。「これ、ツバキです」って。

宮下「そうそう。このものの本質は何なんだろうということ、自分の在りようを問い返すことを通じて考えてみることで、けっこう大事じゃないかな。それは相手のためだけではなくて、ひるがえってもかしらケヤキ君が私のことを好きになってくれるかもしれないという、このささやかな望みを抱くという意味でも、この関係が変わることは大きなことだと思ふんですね。

佐藤「ケヤキと言わないということですか。

宮下「相手と私の関係をもっと深く考えたいから、まず既存の名付けは機能しないですね。少女小説みたいですけど、小さいころの思い出には、困ったときに見上げた木々もあったりして、それは、「ケヤキ」ではなく、悲しいときに助けしてくれる木、だったりしたものね。

宮地「好きになってほしいというのは嫌われる可能性もあるわけで、拒絶される可能性もあるわけです。そういう意味で当事者の人たちを守ろうとするというのは、ある意味、そういう危険性を排除するわけだから。好きになり合う可能性も排除されちゃうし、嫌いになり合う可能性も排除されちゃうし。それが正しさの問題なんですかね。さっきモヤモヤ感というのは私も感じていたことで、「あ、そうなんだ」と思ったんですけど。正

佐藤「でも、その正しさを無自覚に前提にしちゃうと、対象に向き合う自分がどういうアプローチをとるかという距離が生まれてしまひ、等価にならない。

宮下「ちょっと話が外れるんですけど、私は造園をやっています。自然再生みたいな仕事の一番最初にやることは、地図を元に木々の配置図を作ることで、ここには樹高一〇m、胸の高さの周囲が一六〇cmのケヤキが生えています、ここにはクスノキが生えています、という実測図面が出来上がってくるわけです。それを元に例えば地盤に崩落があるとか木に病気があるとか、「問題」が提示されて、それをどう解決していけばいいのかみたいな技術的な話になっていきます。

でも、その木がどういう出自で、どんなキャラクターなのか、「ケヤキ」って人間が名前をつけたけど、でもそのケヤキは「太郎」という名前のほうがよかったと思っているかもしれないし、便宜的に人間がそういうふうに区分して、そういうものだと位置づけただけ。でも、まったく違う関係の中で考えたら違う名前がつくかもしれないと考えていかないと、ほんとにそこに困難があった場合の解決ってできないんじゃないかなって。薬を注入したりすれば、技術的には樹木の再生みたいなことはできるのかもしれないんだけど、樹木が抱える本質を自分自身の存在と重ね合わせながらどう理解し、向き合うのかと。それからできたらケヤキ君にも私のことを理解してほしいし、できれば私のことを好きになってほしいわ、と最近言っているんですけど。「もの」として位置づけてしまつて、定置してしまつた時点で関係が終わってしまったみたいな感じがすごくあつて。

ここにこーいう問題があつて、それにどうアプローチするのかって「問題」として定めてしまつた時点で、全体がすごく見えなくなるっていう気

しさがつきまとうものをアートにするときに、どこまでそこから自由になれるか。

宮下「宮地さん、振り返りの会のように、四肢の不自由さみたいなものをなぜ子供達は取り上げなかったのかって。

宮地「「異形」の人たちなわけでしょ。でも、そういうことには触れちゃいけないというか、美醜の問題とか、そういうことに触れちゃいけないっていうことがあるわけです。でもアートに関して美醜ってすごく大事なテーマじゃないですか。簡単に触れられることではないんだけど。せめてそこを避けて通っているんだよということをちょっとに気づいておくというのは大事な気がして。

宮下「それはすごく大きなことだと思いますね。そこにあえて目を向けなかったのは大人の方なのかもしれないね、たぶんね。子供達がグーの手を作る、その不自由さをどう表現するかという取り組みもありました。ひとつは軍手の指と指を縫い付けて、どのくらい不自由かを体験してもらおうというもの。でも結局それは美醜の問題に正面から向き合うというより、こんな手なのにこんなに工夫していたんだよ、という文脈。結実しなかったのは、そういうことを自分たちが表現として扱うことは悪いことなんじゃないかっていう自己規制だったのかな。でも、それは子供だけではなく参加した大人のちょっとダークな思いやりの判断だったのかな。そこは図工の先生なり私たちは、ほんとに何であるかということは真面目に考えないといけないと思ふんですね。表現とは何だ？みたいなことでもあると思うし。

佐藤「一人で引き受ける。それが最終的に展示になるかではなく、そもそも、それをやるか、やら

がするんです。ケヤキ君が、ただのブツとしての、物質としてのケヤキでしかなかったしまうという。

宮地「関係がなくなっちゃうということですね。

宮下「そうそう。それは今、言われたみたいに、特にケヤキ君と私の関係だったらまだ単純だけれど、社会的にいろんな意味が付与されているものと、どういうふうに、例えば等価なのか、対等なのか、整理区分として付き合うのかよくわかんないですけど、すごく難しいよね。

佐藤「難しいです。でも等価であるといった段階で、いったん他の人と共有可能なところに話が抽象化されてしまふこともあつて、そうすると目の前の固有性から離れてしまふこともある。

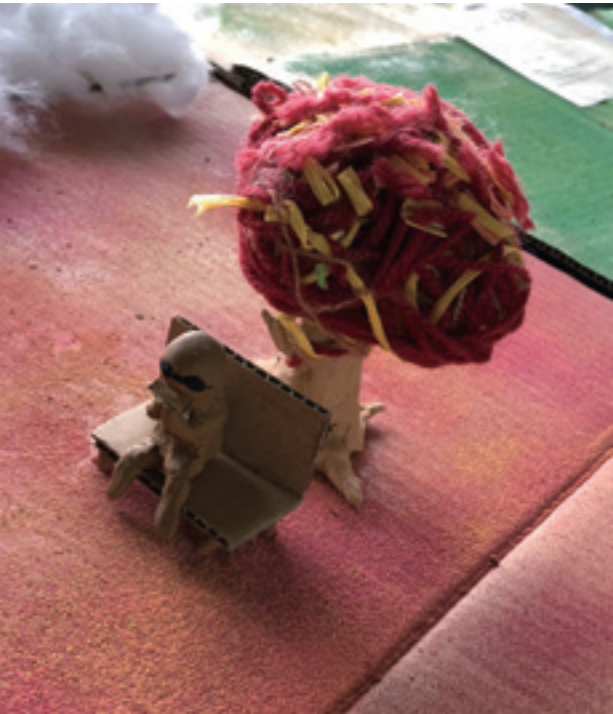
宮地「等価じゃなきゃいけないんですか。

佐藤「うーん、等価でなければいけないか。そうですね。

宮地「関係って等価にならないで、常にどっちかが過剰だったり、足りなかったりするから続くわけで。等価だったら終わりになるのかなと思つたんですけどね。

佐藤「そうですね。揺れ動いていたり、差があるからこそ関係を結び始められる。等価というか、関係を切り結びあり方が対等というか、生身の固有の関係である、となるにはどうすればいいのかというところですかね。

宮下「そうですね、生身の固有の関係。私しかつかれないそのものとの関係とか、その場所との関



●表現は始まりである

佐藤「表現って、それで終わるものじゃなくて、始まるものなのかもしれないですね。誰かの態度

が、他の誰かと共有可能な何かのかたちになる。それで議論が始まったりする。そもそも、表現をするプロセスで、その人にとって自分の外側にあるように見えることも語り直すと自分の問題になったりするじゃないですか。そうすると、そこで終われなくなってしまう。何か別のことを考え始めてしまう。次に表現しなければいけないことが見つかってしまう。何かを表現するのは、そういうものだって思うだけでもやることは変わってくるのかなあ。

宮下―表現は始まりですね。アウトプット＝完了！ではない。表現しようということは、理解しより、模索しより、暗闇の中に足を踏み出そうという感じがする。さらに、誰か他の人の表現、言葉に触れたときの心の揺れ、振動のようなのは、表現されたものの、発せられたものによって展開していく。もちろん、道筋は不明だけれどもね。

宮地―少し戻りますけど、さっきの火をちょっとつけたら横からフッと消されるという話がでしたが、それ自体を表現できたらいいですね。つくけど、消され、またついては消され、みたいな。その現象そのものを出せると。

佐藤―そういえば、メモリアル交流館では、ろうそく型のライトを使って、それをフッと息を吹きかけて消すと語りが始まるという仕掛けの展示をやっていました。普段から施設のあるエリアの地域の暮らしを丁寧に聴き取ったりしているところなので、そうした行為を展示にしてみました。前に聞いた言葉を展示に展開したのかもしれないですね。今、言われて、気がつきました。

宮地―じゃ、同じ人？

佐藤―同じ人です。館長の八巻さんです。館長だけれど、自分で模型を作るところから、展示を作っていました（笑）。八巻さん、闘っているように見えるんです。今、津波で浸水したエリアが、跡地利用などでどんな風景が変化している。そのなかで、とても小さな範囲の植生や周囲の自然を展示するとか、その土地にある小さな生態系を、じっと見つめていたりするんですね。その行為は小さいかもしれないけれど、とても力強いことだと思っんです。

宮地―あるもの全部できるだけ残す方向もあるけど、すごくフレームを小さくして、そこで見えるものだけに絞るっていうのも非常に大事ですよ。ミニマムに。

宮下―そのほうが想像力を喚起するよね。あるもの全部を残しちゃったら、ああ、こういうことなんだっていうことで止まっちゃうけれども、今みたいに非常に抽象化された強度のあるものと、いったいこれは何なんだろうという、少なくとも前のめっていくことは起こるだろうし。前のめる中にそのものと自分の間い、問われる関係は発生するだろうし。

宮地―ゲオルク・ジンメルが額縁のことについて書いているのを、最近たまたま読む機会があって。現代アートでは、絵と額縁の通常の関係からもう一回外れるということを一生涯やろうとしているんだけど、ジンメルの段階ではフレームのあることの意味というか、アート作品から周縁的なものを絶縁させることの意味を強調していて、面白いなと思いましたね。窓なんかを通した風景も、限られて小さいからこそ、逆に見えてくるものってあるし。

宮下―しかも外の世界に対する強い希求みたいなものがね、それが小さければ小さいほど強まるかもしれないし。

● 渡す技術、たたむ技

佐藤―そういう窓を作る技術というか、たとえば展示のようにものを見せる技術は、もっといろんな人が持っっているいいんじゃないかなと思うことがあります。すごくいい展示企画があることやミュージアムという社会的に機能する装置があることも重要だけど、そこで培われた技術が広く使われるものになることが……

宮下―人にものを伝えるときの。

佐藤―何かを渡す技術といえるかもしれませんが。記録の話で言えば、今は簡単に写真が撮れるのでデータをため込んでしまったりするじゃないですか。ため込んだ後に価値を見出しても量が多くて整理できなかったり、増えていけば増えていくけど、これどうしようという負担になってしまったりしますよね。

東日本大震災の後に多くの人が、この経験を伝えなきゃいけないと、たくさん量の写真を残してきたと思います。でも、時間が経てば経つほど量が増えて背負いきれなくなっていく。でも、経験に裏付けされた、それが大事だという動機は強くもっている。だから、そのままにしておくことがより気がかりになっていく。そんなときに地域の共有財産として図書館やアーカイブ、もしかしたらミュージアムに渡すことは可能かもしれない。受け取るほうも大変なんです（笑）。そこまでいなくても、それを手放す技術というか、そうした記録や記憶を供養する技術といえればいい

のか、家庭用救急箱じゃないけど、何かツールがあってもいいんだろうなと考えたりします。

宮下―自分で走馬灯マシンのようなものを作ってグルグル回せばある日走馬灯みたいなものになる。そういうことを心の中で繰り返していくと、憎悪なことを言えないけど、心の中の収まり、みたいなものももしかしたら生まれるかもしれないし。

佐藤―どんな資料が増えていくけど、どっかに大きな収蔵庫ができて解決するっていうのも、おそらくこれから望めない。だから、それぞれの人がプライベートなものをパブリック、セミパブリックに転換していく技術みたいなものが、もつとあるといいだろうなあ、と。それが装置としてのミュージアムが開発、蓄積してきた技術なんだと思います。

たとえば、お葬式で故人の「思い出の品、ありませんか」と葬儀社の人に言われて、昔の写真とか家から持ってきたりする。それで親戚がワアワアしゃべったりするじゃないですか。そうした場所に展示の技術が差しこまれるとか。ほかの人と自分の持っているものを共有する技術って、もつとあるんだろうなあと思ったりします。

宮地―基本的には、編集技術でしょうけど。学術においてもこれまではどれだけため込むかばかり工面されてきて。でも、それじゃあ追いつかないっていうのがみんなわかりつつ、途方に暮れているみたいなのはあります。そこは学術的にも新しい方法が必要になってくるし、そのときにアートなり、いろんな編集なんでしょうね。セレクトするとか、切り口を見つけたとか、そういうのが求められるのかなって感じがします。

佐藤―家族の写真を捨てるのは難しいってなった



ら、カタログをひとつ編集してつくれば、それだけで安心して写真は処分できるかもしれない。そもそも捨てるのがいいかわからないですけどね。ちゃんと捨てるためにも技術が必要なんだと思うんです。

宮地 捨てるというのはのちよっとつながるかもしれないけれど、さっきのハンセン病の施設にしても、いずれ閉じるわけで、ある意味、撤収の技術というか、アートなわけですよ。以前、撤収を手伝ったときに、そんなに私、日頃撤収しているわけじゃないから、逆に新鮮だったんです。撤収の技術って、とても洗練されてないといけないし、でも誰も案外見てない。

さきほどのダムに沈む村は撤収を求められたわけですよ。そのときに生きている人たちがどういうふうに撤収……、畳むなり、壊すなり、何かを残すなり。でも、ほとんどのものを捨てなきゃいけなくて。そういう技術っていうのは、非常に今、求められているんですよ。福島の話も関係してくる。つくるの大事だけど、片付ける、壊す、捨てるのも大事な技術ですね。看取りとか、そういうのもつながっていくんですよ。すべて残すわけにはいかないの、誰かが消さなきゃいけなかったり。

佐藤 福島で家を畳む人たちの映画づくりをしている方に聞いたのですが、家を壊すときに全部は持っていけないから、何を持っていくかをすごく議論しているそうです。意見がばらばらになっ、揉めたりする。それを撮っているそうなんです（笑）。

意思を持って畳もうとした場合と、畳まざるを得なくなった場合でも違うでしょうね。さきほど大西暢夫さんに聞いた話で、ダムに沈んだ村から新しい「御殿」に住んだけど、徳山村に住んでい

たときと同じ暗さのなかで暮らしていると。暮らしをつくるための物理的な器は変わっても自分の使いこなしをしている。ある暮らしを終わらせているけど、その続けたをつくっているんだらうなど。

宮下 そういうの、映画に出てきますね。

宮地 すごく印象的なお話でしたよね。

佐藤 カメラを使っているから見える。暗さが光量でわかるっていう。

宮地 この前ニューヨークから共同研究者が二週間あまり来ていて、彼とディスコンティニュイティとコンティニュイティの話をちやうどしていました。「ゴードン・マッタークラーク展、見に行くといーよ。そうすると、ディスコネクトの経験が感じられると思う」と言われ、彼の帰国後、行ってきたんです。家の真ん中が切り取られる作品とかね。ずれたり、切り離されたりしたときに、逆に感じられるつながりってありますよね。「あれ？」って思って、あつたはずの連続性が切れていることに気づく。で、報告がてら、彼に「あなたは今ディスコンティニュイティを経験しているのか、コンティニュイティを経験しているのか」ってメールしたら、「まあ両方だね」と返事が返ってきたんです。日本で過ごした時間が、帰国という行為で断ち切れ、まったく別の場所に今彼はいる。でも日本での経験の余韻が強くて、日本で撮った写真を眺めたりもしている。生きていく中では、場所や関係性を切断する行為もあるし、人生の何かすごく大事なものが途切れちゃうことがあるわけですよ。そのときに次のステージまで何が残って、何が消えていくのか、何がつながって、何が切れていくのか。

よ。ボーッと見ていて、このビルからこっちのビルには移れないだよねって思ったんです。そのことを同席していた共同研究者にポロッと休憩のときに言ったら、「そうですね。でも何でそのことを今、考えていたんですか」と問い返されて。あまり深く自分でも考えてなかった。

聞かれてみて思ったのが、精神科の患者さん、福祉の生活保護を受けている人、刑務所に入っている人とか、みんなそれぞれそのときだけは何とかケアはされるわけです。でも精神病院に入ったら関係が生まれて、終わったら放り出され、また別の所で、福祉のところでは福祉なりにやってくれるけど、でもそれでちよっとでも収入が超えたら、またそこからスパーンって離されて。何て言うの、まさにビルが立ち並んでいるみたいになって、その狭間のときには誰も何もしてくれないっていうような、とても極端な感じがあって。

刑務所もそうですね。中に入っているときは自分たちの責任だから、絶対死なさないように見張っているというか、ちゃんと食べさせるし。でも、もう出た途端、「はい、さよなら」っていう。まさにディスコンティニュイティ、切断されまくっていて。本来ケアって、その間を埋める仕事のはずなのに、恐ろしく高層ビルばかりが建っている感じ。

宮下 出たら死んじゃうもんね、ストーンと。

宮地 専門家の人たちはその高層ビルをいかに高くするかに、むしろ関心が行っている感じがして、ということを考えておりました。

佐藤 その間に？回路とかつくるのかな。

宮下 回路ができればいいんですよ。でもみんな、何かと何かをつなぐ回路を自分ではつくれ

宮下 今の全生園、それまでの歴史との、ある部分では切断でもあるでしょ？ 何もつながっていないものね。「何も」と言ったらおかげさかもしれないけど、例えば東村山市の小学生がここに見学に行って、話を聞き、映像に撮られた平沢保治さんの言葉を聞く。そこに立ち会う人は何かを伝えているかのように思っているかもしれないけど、そこにもすごい大きな溝をあえて掘り続けている可能性もある。

●切断と結束、柔らかな結び目

佐藤 生活をつくるのは、切断をつなぎ合わせる技術で成り立っているんだなと思いました。自分と外の世界の離れているものとつながき合わせたリ、その必要性が生まれたときに「つくること」を介在させるのが多いような気がする。それが社会的に大きく切断されると修復できなくなっ、もうちよっとジャンプする、個人の生活の範囲を超えたつなぎ方が必要になるのかもしれない。

ハンセン病資料館の展示を見ても、多磨全生園での営みは、すべてが自分の生活をつくっていく作業だったじゃないですか。歩きづらいうから石畳を敷くとか。もちろん、すべては「隔離」という社会的につくられた大きな切断によって生まれているんだけど、日々感じる小さな切断をつなぎ止めることによって、身体を動かす範囲のところの生活をつくる営みがあった。あの場所に行く和生活がある感じがするのは、その痕跡に触れていたからなのかなと思います。

そこが更地になる、公園になる、とまた大きな切断が、小さなつなぎ目の集積のうえを切るときに、もう一度、生活がなくなっていくことを経験するんですね。

るってなかなか思っていないじゃないですか。もちろん誰しもがくれるわけではないのかもしれないから、回路がつくれる人は、回路がつくれない人に違う変な回路をつくってあげるのかもしれないんだけど。今、違うものと違うものをつなぐとか、回路をつくるみたいなのが社会的にもすごく厳しい。必要性の割にね。

宮地 あとね、当事者からするとそんな谷間がビルの間にあるってわかってるんだったら、上に上げないでくださいって、平地に置いといてください、みたいな感じはとってもすると思うんですよ。たぶんハンセン病の施設の、さっき宮下さんが言われた何か許されている感じって、すごい平地で平屋じゃないですか。案外そういうところからきているのかなって感じがしますよね。



●結び方、つなぎ方

宮下 そうなの、そうなの、そうなんです。それはほんとにすごく大きなことで。それはある意味、瀧本さんの生活に根ざした、わりとリアルな生き物としての感覚なんです。

宮地 この前研究会があって、女性薬物依存の研究会だったんですけど。話聞きながらボーッとしていて。窓の外にビルが立ち並んでいるわけだ

宮下「そうね。全生園がビルだったら、また全然印象が違うよね。簡単に言ってしまうと、人間的ではないスケール感だし、質感だし、造られ方になってしまいう。そこで営まれる暮らしもおのずと違うものになってしまいうね。」

宮地「手に届く範囲で、徒歩圏内であらゆるものが手に入るかっていうのも大事だろうし。」

佐藤「全然違う話なんですけど、ビルの間をどうつなげばいいのか、と考えていたら、スパイダーマンのこと思い出しました。あれは特殊な蜘蛛のスーパーパワーを得たヒーローが蜘蛛の糸の力を使ってニューヨークのビルの間を飛び回る話じゃないですか。ある話の最後のほうのシーンで敵のいる高いビルに向かうために最短距離でビルの間を一直線に糸を使って飛んでいくものがありました。ただ、ビルの間が広すぎてスパイダーマンだけでは届かない。そうしたとき、ビルの屋上にあるクレーンをスパイダーマンが飛び方向に作業員の人たちが力を合わせて揃えてくれる。それを

伝って一気に飛んでいったという。そうした何かビルの間を飛んでいく存在なのか、そうした場面があれば、それぞれがビルのクレーンを動かしたりすることにあるのかなと思いました。イメージですけれどね。」

宮下「それも一つのノウハウ、技術ですよね。」

佐藤「ビル化している社会状況は誰もがイメージとして共有できると思うんです。でも、同時にそのありようにそれぞれが違和感ももっているはずで何かきっかけがあれば動くこともあるんじゃないか、と。つなぐことの意味は理解しているけれど、その方法がなかったり、ビルの外から関わる存在がないだけで、それがあれば、それぞれがつなごうとする意思はもっているような気がします。」

宮下「それは逆に希望で、平屋は一つの解決策だと思っただけど、否応なしに極細になっちゃった関係を、マッタークラークじゃないけど、ちょっとここを切ってみて、うがってみて、ここにこつちのもの、クレーンを出してきてつなげてみようみたいな営みは、生きる上でのクリエイティブティなのね。どこでも必要になる。高層ビルだけじゃなくて。今そのやりくりする力がすごく低下していて、違うところに橋をかけるとか、違う人とつながり合うことが難しくなっている気がします。」

佐藤「資料館で話を聞いていて、そういう存在が必要なんだろうなと思いました。全生園のことを気にかけていても、どうしても（資料館や全生園の自治会など）なかにいると自分の「施設」のこ

とにしか触れられない。だから、違う存在が、たとえば宮下さんのような人だったり、NPOという組織だったり、アーティストだったりするかもしれないけれど、おせっかいをしにいくのは大事なんだろうなと思います。」

宮下「入所者の方が愛情を込めて作った盆栽の展示とかやってたんじやないかな。昔。盆栽があつて、名前があつて、それを慈しむ誰かの姿や人生が見えて来たら面白い。」

宮地「ほかの人が触手をのばしたくなるような何かがあるっていうのはすごくいいイメージですよ。まさにそれがミュージアムがすべき役割のような感じ。」

宮下「そうだね、ほんとにそうだね。平板な無抵抗なものを、パネルみたいに平たく展示しておくのではなくて、自分の中の何かと感応し合う、ものに触れることができるかもしれないとか、残されたこたつに座ってみることで、そこに住まう人

を思い、同時に、自分の子供時代を想起させるとかね。自分自身と重ね合わせることができると、静かな対話がなされることはとても大事かもしれないですね。（二〇一八年九月一六日）